

神器之世大意 完

33

624

Ⓜ

014156-000-3

33-624

神器之世大意

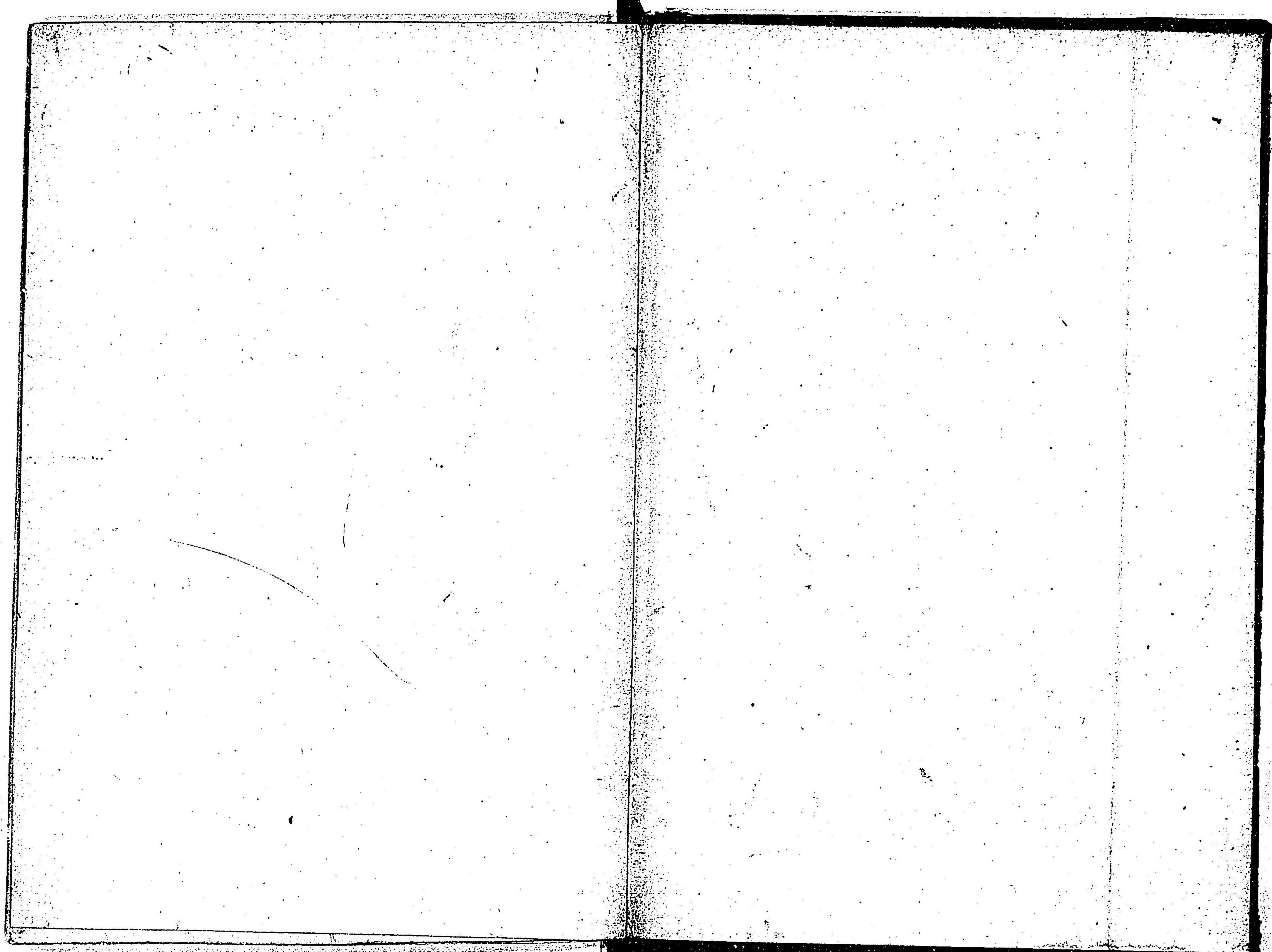
宮崎 濁卑/著

M40

ABB-0446









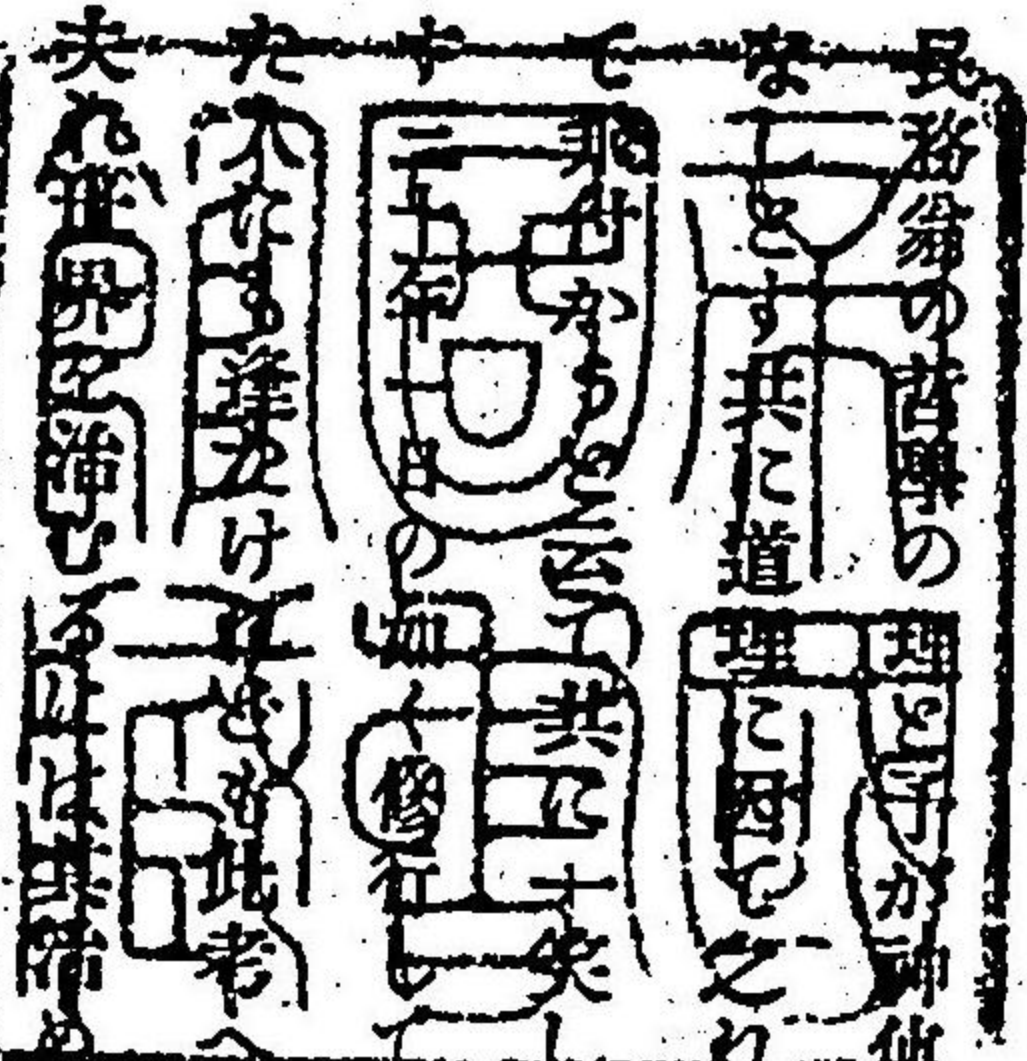
33  
624

民務翁宮崎濁卑著

神器之世大意



序



長務翁の哲學の理と守が神佛の理と全く符合した、翁は學理を以て此上なしとし予は神理を以て此上なしとす其の道理を信するの爲め、若し世界に道理以上のものが有たらば種を旋さずて飛ぶかちを云て其の失したり、是れ兩人一見忽ち齟齬己にも勝る處である予一身の衣食を日まごるは世界の治まるべき理合を考ふる爲めである、是れ迄書物も見たるも達たけは此考へを同じくする者が無かつた、然るに翁は達た初めに此の事を云はれた、夫れ世界を極むるは第一である、終極の目的なきものは終に失敗に了るとは世間皆云ふ所である、然るに世界に居ながらまだ世界終極の目的を云た人は一人も無い、基督も孔子も云て居らぬ、釋迦は人が段々若死する様になりて詰り世界が盡て了ふと云つたけれども終極の目的は云はなかつた、之れを以て是れ迄の宗教學說が世界終極の目的まで見極めて立てたので無いと云ふことが明らかである是れ翁が積年辛酸刻苦して學理を研究された所以で有つて其結果として世界終極の目的を見出し之を條理的に説明し世界進化上達の極途に此に至るものである事實上必ず至り得らぬものであることを徹證まで擧げて示めされた、實に翁の發明は世界無上の發明である、蓋し真空進化して神靈時代となり猶進化

るに世界に居ながらまだ世界終極の目的を云た人は一人も無い、基督も孔子も云て居らぬ、釋迦は人が段々若死する様になりて詰り世界が盡て了ふと云つたけれども終極の目的は云はなかつた、之れを以て是れ迄の宗教學說が世界終極の目的まで見極めて立てたので無いと云ふことが明らかである是れ翁が積年辛酸刻苦して學理を研究された所以で有つて其結果として世界終極の目的を見出し之を條理的に説明し世界進化上達の極途に此に至るものである事實上必ず至り得らぬものであることを徹證まで擧げて示めされた、實に翁の發明は世界無上の發明である、蓋し真空進化して神靈時代となり猶進化

40 3 2  
内空



して人世となり人世進化上達して榮光時代となり吾人々類の光輝は日月よりも旺んに吾人々類の徳は天地よりも大なるに至る爰に至れば天地も既に用なし天地終了滅盡して大真空に歸す

月も日もはえなきまでに天の原高き光の照らす御代かな

本庄波也登謹誌す

緒言

本著は宇宙の本體たる大真空即ち大真天地に關する大神靈と精神及び眞理の三つが一致協力して靈動する事實並に進化の理法に關する自然淘汰人爲淘汰神爲淘汰の事實を講究して神器の世の必らず到來すべき道理と實際を確實ならしめんとするにあり

神器の世及び永遠無窮なるべき榮光の世を明らかにせんとするには其本原より講究せざるべからず然れども直ちに之れを説くときは却て聞え難からんことを畏る因て之れを人生に比喩して説ん夫れ人生の最初胎内の一滴より發る之れが發育進化して遂に完成の期を得て現世に生出す已後乳兒時代幼稚時代を経て學童時代に達す則ち小中大學を卒へて名譽の學位を荷ひ郷里に歸り父母の家跡を繼ぎて其家名を輝やかすに至る此間若干の變遷若干の辛酸若干の試験若干の淘汰を経て遂に家名光輝時代に達するが如く地球表面にも又總ての生物界にも又文明と稱する人生樂土的世界にも一様に皆此胎内時代より家名光輝時代までの各種時代を経歴し來り又經歷し行くべきものである實に現今只今が科學時代の末葉にして人世が恰かも小中大學の總てを卒業して高天の原の父母の實家に歸り眞知眞勇眞善なる三種の神器を相續修養して其榮光を輝かすべき期運に到達したのである然るに現在の我日本は勿論世界各國皆徳教危機過度時代にして舊宗教舊道德の威嚴は既に地に墮ち之れに代るべきもの未だ來らず文



明の波濤全世界を動搖せしめて人は物質主義實利主義の一端に奔つて居る處で未だ其波濤を靜めて之れを補ひ之れを整理して人心を維ぐべきものなく政治上經濟上工業上の諸制度の發達に複雑を加ふるにつれて一般人心は切りに新宗教新道德の需要を感じつゝあるは普く人々の知らるゝ處ならん嗚呼實に一般舉て眞知眞勇眞善なる神器の世の開門せられんことを渴望するのである、故に吾人は四海同胞と共に此難關を開きて眞の洪福眞の安全を得んが爲め三種の神器を講究して之を修養するのみならず之を萬事萬業に靈用せしめて榮光の世に到達せねばならないのである是れ本著のあるゆえんで有る

著者しるす

# 神器之世 大意

## 目録

第一編 神器之世の元原……………一

第一章 神器之世の興るべき時期……………一

第一節 神器の世とは如何なる時代を云ふか……………一

第二節 天然の世と人事の世及び神器の關係……………二

第三節 動物界と人世界の區別……………三

第四節 大古の人類は天然世界中に人世と云ふ樂土を建立せられたる事……………三

第五節 神代に於ける高天原の事實 並に人世と云ふ大本家の家庭教育……………四

第二章 日本人民の大責任……………四

第一節 高天原の神事業を繼續して永遠無究に隆盛ならしめざるべからざる事……………五

第二節 天津日嗣と天壤無究の神勅……………五

第三節 日本歴史の眞善美を永遠に繼續せしめざるべからざる事……………六



第四節 日本をして世界の進歩に後れしむべからざる事……………六六  
第五節 日本に對する個人としての心得……………六六

第三章 平和の戦争……………七

第一節 日露戦争に於ける日本勝利の理由……………七

第二節 日本は果して平和の戦争に勝ち得るか……………八

第三節 工藝技術の競争……………八

第四節 氣運に乗じて活動せざるべからざる事……………九

第五節 常識的習慣的一定の修養法……………一〇

第四章 神器の戦争……………一〇

第一節 心の城廓と精神の武備……………一一

第二節 三心の協力と日々の戦ひ……………一一

第三節 名譽の戦争(或は榮光の戦争とも云ふ)……………一二

第四節 榮光の御霊と鎮靜の御霊……………一二

第五節 迷魂怪物と神器の祓……………一三

## 第二編 天地と人世の循環法……………一五

### 第一章 宇宙の本体及び神と理と自我……………一五

第一節 天地と人世及び自己の關係並に其循環……………一七

第二節 靈妙不可思議幽玄 第一第二第三段……………一八

第三節 宇宙の本体大真空大眞天の觀念 第四段……………一八

第四節 大神靈發動の感應 第五段……………一九

第五節 大心魂の發達期 第六段……………一九

第六節 大眞理の發達或は物質原素の關係 第七段……………二〇

第七節 天体の構成或は星期 第八段……………二〇

第八節 天体地球の成功天之常立とも申す 第九段……………二二

### 第二章 開世關 此世の開闢或は發生門とも云ふ……………二二

第一節 天然の世の第一紀生物の生殖適應時代……………二二

第二節 動植物繁殖時代 天然の世の第二紀……………二三

第三節 人世樂土建築時代……………二三



第四節 君主獨裁時代……………二三

第五節 人為宗教時代……………二四

第六節 科學實業時代 世の大學校に比す……………二四

第七節 神器の世 第一第二第三……………二五

第三章 人世に於ける眞の圓滿……………二五

第一節 精神的眞聖時代……………二六

第二節 精神的眞神時代……………二六

第三節 神事業を成し終りて天に歸る時代……………二七

第四節 死と云ふ大難關に就ての觀念……………二八

第四章 終世關を越えて靈妙に入る事……………二九

第一節 靈妙の第一段眞理の始末……………二九

第二節 靈妙の第二段物体の審理……………三〇

第三節 靈妙の第三段生靈に關する審理……………三〇

第四節 靈妙の第四段神靈榮光の清淨界……………三一

第三編 眞神……………三三

第一章 神の種類と信仰に就て……………三三

第一節 宇宙大神靈に對する感應の始め……………三四

第二節 大神靈は靈魂の父たること……………三五

第三節 精神の修養は眞理を以て行ふべきこと……………三五

第四節 榮光の神及び榮光の功績を明瞭ならしむること……………三六

第五節 信仰と神習の區別……………三七

第六節 總ての神は人世のみに靈動せらるゝ事……………三七

第七節 眞理を利用して進化するものは人類社會あるのみ……………三八

第二章 大神靈の靈力……………三八

第一節 神靈は無形の大技術者に均しきこと……………三九

第二節 神靈は無形の大祖宗者たること……………三九

第三節 神靈と精神の親和力並に神爲淘汰……………四〇

第四節 神爲淘汰の最も經驗し易きこと……………四一



第五節 人為的宗教は神爲淘汰に反すること……………四一

第三章 榮光の神の活靈……………四二

第一節 榮光の神の紀元……………四三

第二節 榮光の神の最初の狀態……………四四

第三節 榮光の神の性質に就て……………四四

第四節 榮光の神の禮拜及び祈念……………四五

第五節 鎮靜の御靈及び其の祈念……………四六

第四章 眞理の靈用……………四六

第一節 三神一体の活動……………四七

第二節 天地人の三中府……………四七

第三節 宗教的信仰と道理的信仰……………四八

第四節 神信仰と學術……………四九

第五節 人世社交的信仰と道理的信仰……………四九

第六節 一切の信仰一切の信用をして一致協力せしむる事……………五〇

第四編 神ながらの統一……………五一

第一章 圓滿なる皇統……………五一

第一節 神ながらの皇統……………五二

第二節 天地の代表者 釋迦基督の關係……………五二

第三節 分業の必要なると共に統一の必要なる事……………五三

第四節 有形の統一……………五三

第五節 無形の統一……………五四

第二章 高天原の遺風たる大小の神社……………五五

第一節 皇統と神社の關係……………五六

第二節 神社の信仰と人為宗教の信仰……………五六

第三節 神社は惟神の會議場たること……………五七

第四節 神社には改悔法慰安法を實行するに天祐の功力を有し給ふ事……………五八

第五節 神社は神事業と共に生産的事業をも獎勵せしむること……………五八

第六節 神社は無形の交通機關たること……………五九



第七節 模範村を作らんと欲せば神社を先きに復古せざるべからざる事……………五九

**第五編 神爲淘汰**……………六一

**第一章 ダーウィン氏の淘汰説の幼稚**……………六二

第一節 進化論の期限及び性質……………六二

第二節 生存競争は第一期にわらずして第二期より始まる事……………六三

第三節 生長的進化の期……………六四

第四節 行爲的進化の期……………六四

第五節 淘汰の區別……………六五

**第二章 神爲淘汰の本原**……………六五

第一節 進化論者の紀元論……………六六

第二節 宗教家の紀元論……………六七

第三節 進化の順序並に人爲淘汰の興り……………六八

第四節 精神的慾情の發達……………六九

第五節 神爲淘汰の發達……………六九

**第三章 神爲淘汰の創世に關係すること**……………七〇

第一節 物質以上の信仰……………七一

第二節 人類の精神的系統は天津神より繼續せしこと……………七一

第三節 萬物の人間の利用となりし元因……………七二

第四節 人間は人間と云ふ道を行はざるべからざる事……………七三

第五節 厭世と人爲宗教の基元……………七四

**第四章 神爲淘汰の現在の状態に就て**……………七四

第一節 佛教の功德と世の關係……………七五

第二節 支那の神爲淘汰 儒教道教……………七六

第三節 基督教の神爲淘汰……………七七

第四節 哲學の神爲淘汰……………七八

第五節 科學の神爲淘汰……………七八

**第五章 完結 眞知眞勇眞善**……………七九

第一節 神器の修養……………八〇



第二節 神器の人民……………八〇

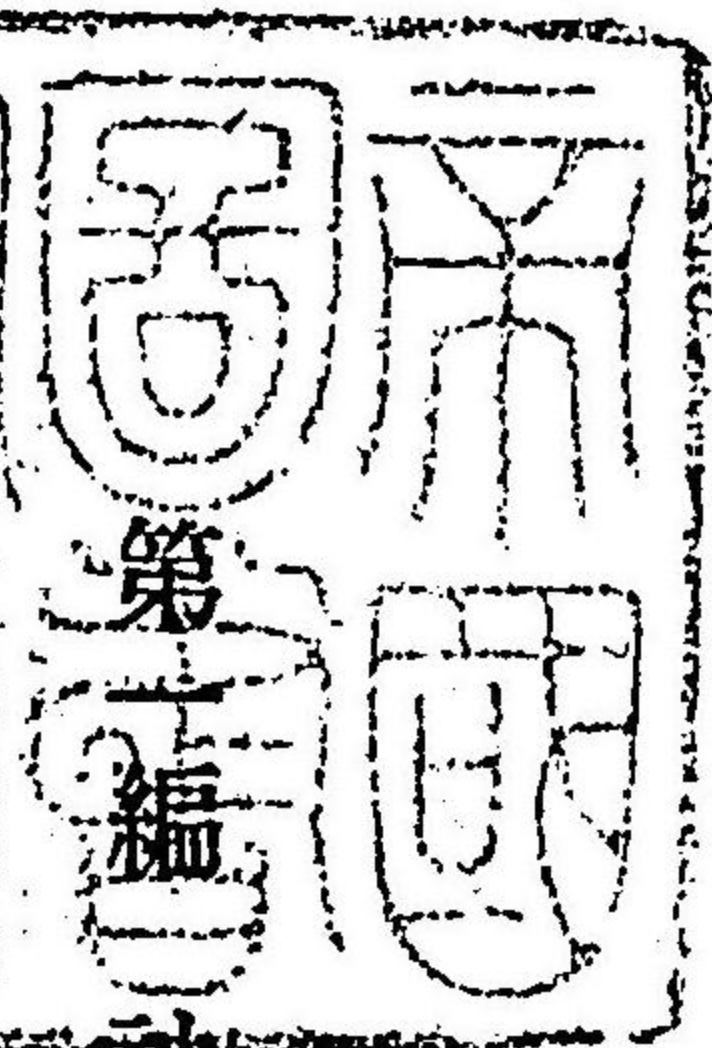
第三節 天地人世の基點と完結……………八一

第四節 最大なる高尚優美と最大なる安心立命……………八二

目錄終

神器之世 大意

民務翁 宮崎 濁 卑 著



神器之世の元原

天地間にあつとあらゆる物質的現象は勿論、精神上及び神靈に関する靈動と雖も元因なくして活動的結果の生ずるものはありません、故に神器の世も今日新しく興るべきものにあらずして、大古天然の世即ち高天原に於て基創せられたものであります、尙ほ其の本元を究むれば宇宙の本体天之御中主神より出来せしものであります、即ち真知、真勇、真善なる世にいたるので今日の繁雜なる過度時代も神器の世に到達するにあらざれば眞の平和にいたることが出来ないのであります。

第一章 神器之世の興るべき時期

凡そ世界の事は何事にかぎらず自然的生長と人爲的世話によるべきものにして、神器の世の神髓も、高天原に於て初生し、天然の世の家庭教育を受け、又人事の世の第一第二及び第三科學時代の物質的



總ての研究を卒へて、眞知眞勇眞善の世に到達すべき期運に至つたのでありますから、吾人々類は此時期に乗じて、之を上達せしむるにあらざれば、世界は益々複雑となりて遂に大破裂を來たすやもはかられません、殊に我日本國人民は其大本家高天原の遺屬なるがゆゑに、世界萬國人民に率先して之れが爲めに神器を修養し、斯の關門を開放して神器の世にいたる榮光を輝さねばならないのであります。

### 第一節 神器の世とは如何なる時代を云ふか

神器の世は眞知眞勇眞善なる三種の神器の性質の通りに實行せらるゝ世即ち基督教に理想せらるゝ全知全能純善と同一なる意味であります、然るに耶蘇教にては神は全知全能純善であれども人も世も罪惡なるものにして基督の血の贖ひによるにあらざれば神に近づくとは出来ないと申して全知全能純善に近づけざれども我が高天原の教へは人も世も全知全能純善に到達せらるべきことを理論的に申すのでなく、現在只今が之に到達すべき時運なれば是非之に到達せねばならないと教へらるゝのであります。

### 第二節 天然の世と人事の世及び神器の世の關係

天然の世とは歴史的王國の未だ興らざる以前の世にして、約今より殆んど五六千年以前の其の先の世のことでありますれば、之を知るに由る所なきが如くなれども、人世の文明的總ての本元は即ち天然

の世に於て開創せられたものなれば、之を推して研究すれば不完全なる歴史より却て確實なることがあります、又人事の世とは歴史的王國を始めとして人爲宗教時代科學時代と引繼ぎて今日は其末葉即ち神器の世に移らんとする所であります、是等の關係に付き其の道理を明かにするにあらざれば、現在の繁雜なる世より超越して眞の平和眞の幸福眞の安全に至らしむることが出来ないであります。

### 第三節 動物界と人世界の區別

人世界と動物界との間には動すべからざるの區別がありまして、決して混同せらるべきものでありません、然るに哲學者科學者或は佛敎家は人と畜と混同的道德を唱ふるがゆゑに、道德に統一がありません、その上此の如き道德は大古天然の世の主義に違叛するのみならず、大神靈の感應力や眞理の向上を殺害するものであります、何となれば人類社會の大祖が一度自然界中に人世と云ふ樂土を建立せられたのが抑々道德の最初であつて禽獸界にはこれありません、故に彼等動物とは此の地球のあらん限り區別せらるゝのであります、それゆゑ人世と云ふ樂土が榮光的に繼續すればする程其區別が益々明かとなりて獨り人世のみ天壤と共に無究に榮えらるべきものであります、是等の區別を明瞭ならしむるにあらざれば眞の倫理道德とはならないのであります。

### 第四節 大古の人類は自然界中に人世と云ふ樂土を建立せられたる事



進化論者は人類の大本は猿の一種より進化したるものなりと論ずれども、夫は物質的外面のみの論にして形体は如何に下等動物の如きものより進化せるも、其精神に至つては猿族は愚か實に鬼神も及ばざる程の大勇氣と神靈感應の靈力がありたればこそ、大古の最も猛烈なる獸類や荒蕪の地を開拓して人世と云ふ樂土即ち開明界の大基礎を建立せられたるものならん、故に吾人は是等の大恩を報ずると共に此の世をして益々善良に換言すれば是非とも神器の世に到達させねばならないのであります。

#### 第五節 神代に於ける高天原の事實並に人世と云ふ大本家の家庭教育

我が神州高天原に於ける神事業の事實は、神代史と神武天皇より明治の御代までの來歴と、今日の世界的開化の三事によりて講究すれば自ら明瞭に悟覺することが出來ます、又大古高天原の教へが世界と云ふ大本家の家庭教育にして、彼の佛教や耶蘇教や又儒道等の如きは、人事の世に於て人爲的に一時的假りに興したるものなれば永遠無究の教へではありませぬ、誠に神器の教へこそ、世界的大本家の眞の教法にして、人世のあらんかぎり永遠に繼續せられねばならない所の大切なる神ながらの教へであります。

### 第二章 日本人民の大責任

大古天然の世に於て建立せられたる人世と云ふ樂土には、世界人民均しく住居して尙ほ其の開化に盡力しつゝありと雖も、獨り高天原の神ながらの教へに至りては、日本が大本元でありて然かも大古天然の世の大家庭教育をもわはせて之を繼續するのみならず、尙ほ之を世界萬國に普教して永遠無究に榮えしめざるべからざるの大責任を負ふて居るのであります。

#### 第一節 高天原の神事業を繼續して永遠無究に隆榮ならしめざるべからず

世は人事の世の第一第二第三の政事宗教科學等の自然生活的實事を學び卒へたるものなれば、是非天然の世の大家庭に歸へらねばなりません、然れども天然の世の大家庭は我が日本に存するのみ、換言すれば普く人民の眞に歸依すべき教は神器の修養より外にあるべきものにあらざれば、早く神器の教を日本は勿論、世界萬國の人民に知らしめて其歸依する所に歸依せしめて榮光的眞の行爲を行はしめねばなりません。

#### 第二節 天津日嗣と天壤無究の神勅

申すも畏けれども、天津日嗣は、高天原の御開祖、天照大御神の御繼續に在して、高天原の神事業の一切を御支配し給ふものなれば吾人日本國民は、天津日嗣の尊さと共に皇祖天照大御神の御勅言寶祚



の隆んなること天壤と共に究り無しとの宣言を深く心魂に刻して政治宗教實業等の總てに就て神ながらの神爲事業に習はねばなりません。

### 第三節 日本歴史の眞善美を永遠にまで繼續せしめざるべからざる事

實に日本の來歴は人爲的のものにあらず、總てが神爲的のものにして、自然の眞善美が備はりてあります、故に之が倫理道德等に適應するのみならず、自然の進化法にも適應するのであります、尙ほ之れに科學的文明の實事と眞知眞勇眞善なる三種の靈力を加へて永遠無窮に隆昌ならしめねばなりません。

### 第四節 日本をして世界の進化に後れしむべからざる事

日本をして世界の進化に後れしむるも又率先せしむるも只人事の世の殘物に執念すると然らざるときに、あるのみ、人事の世の殘物とは人爲宗教等の倫理道德にして尙ほ是等に執念して適實なる改革を行はざるときは國家は世界的自然の進歩に後れねばならないのであります、故に佛教を始め人爲總ての宗教等に改革を行ひ高天原の大家庭たる神器の教へに歸依せしめ世界の進歩に率先して眞知眞勇眞善の世に到達させねばなりません。

### 第五節 日本に對する個人としての心得

個人としての日本人民の總てが人事の世の殘物即ち人爲宗教の假教を迷に斷念して、高天原の自家本眞の家庭たる神器の教に依りて其の精神を修養するにあらざれば、日本をして世界的進歩に率先して眞知眞勇眞善の世に達せしむることが出来ません、而して神器を修養することは只我が心に三種の神器が神より與へられてあると心得ればそれで宜しいのであります。

## 第三章 平和の戦争

戦争にも種々ありて砲丸の戦争もあり經濟的戦争もあり又道德的善惡を争ふ戦争もあります、兎も角戦争と云へば恐懼すべき事ではあるが生物の發生してより生存するには必ず戦争と云ふ意味を含む所の競争絶ゆるものではありません、然れども世の進歩するに従ひ生命を取り遣りせねば纏まらぬと云ふ様な極端なることがなくなつて、平和的に治められる時期が必ず來るべきものであります、換言すれば戦争は惡事を取拂ふこととして極端なる人世の大掃除大祓の様なものでありて世に惡事のあらん限りは極端なる大掃除も行はねばならぬけれども追々神靈精神眞理の一致協力せらるゝに隨ひ常識的掃除のみにて極端なる大掃除を行はざるも足るのであります。

### 第一節 日露戦争の日本勝利の理由



科學的道理を以て理會するならば日本は露國に勝たるべきものではありません、然るに其の勝ちたる所以のものは日本には高天原より傳來の先天的天祐の精神があるからであります、換言すれば此の精神と西洋の科學と融合したる結果と申さねばなりません、元來日本は支那に後れて西洋と交際を結びたるにも係らず、哲學科學藝術等總ての文明を盡く同化せしめたるものは惟神の精神即ち眞知眞勇眞善なる大神髓が存在するからであります、若此の精神がなかつたならば支那にも露西亞にも決して勝つことは出来なかつたのであります。

#### 第二節 日本は果して平和の戦争に勝ち得るか

人世の戦争は國家に對する神靈の感應の厚薄によりて、最後の勝利が得らるゝのであります、國家に對する神靈の感應とは、宇宙の本元大神靈、天之御中主神、即ち日本國體の本元に感應すること、又天津日嗣に感應すること、其次は自然的名譽に感應することにして、日本の勝利は此の三つより出でたものであります、是れ取りも直さず、神器の精神修養でありますれば、平和の戦争に勝つにも、必ず神器の修養を第一として上下人民と共に一致協力して神事業的に勉強すれば、腕力の戦争よりも大勝利を得ること決して不可能の事ではありません。

#### 第三節 工藝技師の競争

國家としても個人としても競争に打勝たんとするには、精神を眞正に修養するにあらざれば、世界に對して此の競争に勝ち得ること能はざるのみならず、自然の發達をも妨礙するものなれば國家の榮光をも合せて惨殺せらるゝものであります、故に個人は勿論國家に對する所の工藝技術等の實業的精神を養はねばなりません、然かするには神器の修養を第一とし次は科學的技術次は世界的向上進歩を目的とするのであります、現在の我國は第二第三に着目せられたるも惜むべきかな、第一の肝腎かなめたる神器の修養には學術界は勿論、一般人民に於ても之れに着眼せられざるは之れより憂慮すべき事件はありません。

#### 第四節 氣運に乗じて活動せざるべからざる事

人には勿論世界にも天地にも自然の氣運があるものなれば其の來るを待ちて之に乗じ是れと共に活動するにあらざれば腕力の戦争には勿論、平和の戦争にも勝つことは出来ません、果せるかな現在の我國は眞知眞勇眞善の世に到達せらるべき氣運にして此に乗ずるには申すまでもなく神器を修養するにあらざれば、個人に於ても國家に於ても世界的競争に打勝ちて先達を占ることが出来ません、若し現在の此の氣運を脱逸せしむるときは再三之を得ることが出来ません、故に之を脱逸せざるやうに神器の修養に従事して此の急務に應せねばなりません。



### 第五節 常識的習慣的一定の修養法

精神修養法は、一國は勿論世界的に一定の方法を用ゐるにあらざれば、眞の道徳も眞の信仰も興らざるものであります。然るに國家及び世界的に一定なる精神修養法を得んとするには人為的宗教は勿論、哲學科學等人事の世に求むることなく、只高天原の惟神の教に求るよりほかないのであります。是れ取りも直さず神器の修養にして誠に此の修養こそ世界的常識的習慣的に精神の修養法を一定ならしむるものであります。何となれば神器の修養は眞知眞勇眞善なる修養にして日本は固より世界何國の人民にても普く欲願するものであらざるものなるゆゑであります。

### 第四章 神器の戦争

神器の戦争と言へば程かならざる如くなれども、吾人の精神も身体も始終何者かと戦ふて居るものであります。就中腕力の戦争の如きは人事の世の終りと共に終るものなれども、平和の戦争即ち神器の戦争は是より益をさかに行はねばならないのであります。換言すれば政治宗教教育等及び繼てのもの、悪事弊害等を根絶清めて眞知眞勇眞善なる政治宗教を育實業等に到達せしむるには神器の競争に依らねばならないのであります。再言すれば神器の世に到達せしむる爲めに神器の大敵即ち身体を盡し精神を盡して奮闘するのであります。

#### 第一節 心の城廓と精神の武備

吾人々類は天然自然即ち宇宙に均しき大虚空心を有するものであります。然れどもそのあまり廣大過ぎて人世常用に適應すべきものでありません。故に此の虚空心中に人と云ふ精神的城廓を構へ之に神鏡神劔神瓊なる武機を備へ附けて禽獸的悪奸を撃退せねばなりません。換言すれば我れは人なりと云ふ心に精神的城廓を建築するにあらざれば人と云ふ資格は定まらないからであります。亦神器の武を備ふるにあらざれば邪惡を退けて人と云ふ榮光を輝すことが出来ません。是れ誠に大切にして服膺すべきことであります。

#### 第二節 三心の協力と日々の戦ひ

吾人の心は小天地にして獸類も住み又人間も居る、又天津神も御住居なさるゝものであります。換言すれば何如なる人と雖も其心には必ず神心獸心人心の三つありて、時としては大に紛亂することがあります。故に神心主となりて人心之を助け獸心之に服役するときは自ら心が一致協力せられて神心的となるものであります。此の如くに心性の三心が一致協力すれば、日々の戦争即ち時々の困難に打勝ち



て其心願を成就する事が出来るのであります。さして世界と共に榮光を輝かんとするには神心が皇帝となりて心の王國を統御するにあらざれば心の王國が治まりません。語を換へて之を言へば自己の必政が明かに治まらぬに安りに他人に關係して國家的精神治修を求むるとも決して求め得るべきものでありません。

### 第三節 名譽の戦争(或榮光の戦争とも云ふ)

單に名譽のみ言へば宗教家道德家の歡迎せざるものゝ如き感なきにあらざれども決して然らず夫れ名譽なるものは宗教にも道德にも必ずあるべきものにして唯其の性質を異にするのみ、其の第一は現在の社會に賞賛せらるべき名譽即ち軍功政功業功の類であります。第二は世界を救済すべき教法の類即ち釋迦孔子基督「ソークラテース」の如き後世に顯はるゝ名譽であります。第三は自己の本心が眞理及び宇宙の大神靈に榮光とせらるゝ所の直覺的名譽であります。此の三つの名譽は人世界のみにありて他動物界にはありません。然れども現在吾人の願ふ所は第一第三にありまして第二の名譽は其中に含有せらるゝも一種特別なる名譽にして現代的に論じ得らるゝものではありません。

### 第四節 榮光の御靈と鎮靜の御靈

人には靈魂ありて身体は死するとも其靈魂は決して死すべきものではありません。然れども人の靈魂には二様の區別があるものでありますから、之に能く注意して靈動的勉強するにあらざれば此の世に生出したる甲斐がありません。靈魂の二様とは一は榮光にさかえ給ふ御靈一は鎮靜にしつ來り給ふ御靈であります。人死するとも榮光の活動を爲したるものは其榮光と共に世の終りまで此の世を守護せらるゝものであります。又榮光の他の御靈即ち鎮靜に歸する御靈は宇宙の本体大真空に歸靜せらるゝものであります。換言すれば鎮靜の御靈は大真空より來りて又大真空に歸へり給ふゆゑに當然のとなれども、榮光の御靈をして空しく大真空に歸せしむるのは當人にとつても世界に於ても惜むべき事でありませぬ。否らずして榮光の御靈を遺さず徒らにして死するものは惜むべきことであります。况や世を欺き人を損害せしむるに於てをや、故に人たるべきものは是非榮光の御靈をさかんならしめんが爲に榮光ある事業に勉強せねばなりません。然らざれば大に後悔する時が必ず來るべきものであります。

### 第五節 迷魂、怪靈と神器の祓

人世時としては榮光の行ひや榮光の御靈を遺さるのみならず、却て惡事を行ひ世の榮光をも滅殺せんとすることがあります。是等の人々は榮光の御靈を損害したるが故に身體死すれども靈魂は宇宙の大真空に鎮靜することが出来ないであります。是を迷ひ御靈と申して若し人々に感觸せしむれば



きわみありと言ひ傳へます、加之ならず狐狸の如き妖怪ありて無知の生民を惑はすとの謠言もありま  
す、按ずるに迷魂怪物はあるべきものとするも彼等が自己の悪事に依りて自業自得に迷ふものなれば  
人世を犯すべきにあらず、其の之れに犯さるゝものは人と云ふ資格を得ざるからの事でありませう、  
故に人は人たるの資格を備へて神器の修養を行ふのみならず、彼等迷魂や怪物の爲めに時々神器の被  
ひを行ひ彼等をして宇宙の大真空に鎮靜する様に祈念祈禱せねばなりません、是れ彼等迷魂怪物を鎮  
靜せしむると共に世界の人心をも清淨潔白ならしむるの方法であります。



欠

MISSING



### 第一節 天地と人世及び自然の關係並に其循環

宇宙間に存在する所の總ての物体にして始終あらざるものはありません、其れ始終あるが故に自然の循環もあるのであります、即ち日々は始終の循環あるが如く人間一生にも世界にも天体地球にも自然の循環ある是れ即ち眞理と云ふものにして天地自然の法律を吾人々類に教ゆるものであります、此の如く吾人々類は小なりと雖も宇宙に大關係を有するものなれば其年月時間に大小の差こそあれ始終の循環の方法に於ては殆ど宇宙と一樣なる道理を有するものなれば、是れより天地人世の圖に就て講究することに致しませう。

偕て圖の中央は宇宙の大真中我國神代より稱へられし天之御中主神に在りまして是れ即ち總ての神の總稱であります、第一圈は幽玄と顯明及び生前生後死前死後を區別したるもので其開世關とは發生門の義にして閉世關とは死亡門の義であります、第二圈は天地人世の循環法を大別して示したるもの、第三圈は變遷進化の狀態を三十六段に細別して顯したるものであります、而して大別には各々大關門あり又小別にも各自小關門がありて世之れを超越せんとする時には必ず非常の變遷と大ひなる困難が生ずるものであります、其の變遷に乗じ其の困難に打勝つにあらざれば自然の循環に隨ひ世の進化に適應することが出来ません。



第二節 靈妙不可思議幽玄 第一第二三段

靈妙不可思議と云へば科學者の或は嫌ひなきにあらざれども不可思議あるが故に反て不可思議の價直あるので若し不可思議なくば知能を有したる人世程つまらぬものはありません、換言すれば不可思議あればこそ、神と云ふ大靈力も顯はれ出で又我等の靈魂も之により來るのみならず、又科學者の主とする所の眞理も不可思議より出でたるものである、此の如く總ての者は一として不可思議より來らざるものはありません、故に不思議は總ての本元即ち總ての母であります、故に此第一第二第三の三段を不可思議の段即ち眞天真靈と申すより思慮する事も何にも出來ないのであります。

第三節 宇宙の本体大真空大眞天の觀念 第四段

不可思議中に容易に觀念せられ得べきものは大真空であります、是れ宇宙の大体にして取りも直さず眞の大真空であります、何んとなれば天は形のあるべきものでなくして總て形ちあるもの生あるもの靈力のもの總てを納入するが眞天の大靈の能力であります、故に神も靈魂も眞理も總ての物も此大真空なる眞天の靈母によらずして此の世に出入して活動することは出來ません、此の如く總ての本元の不可思議なることを了解するにあらざれば人世循環の理は明かに講究することは出來ません。

第四節 大神靈發動の感應 第五段

宇宙の大体は大真空大眞天である此の大真空大眞天に又靈妙不可思議の靈動力が在るのであります、之を宇宙の大神靈と云ふ、此の大神靈が生に感じ物に感じ理に感じて宇宙間にありとあらゆる物にも理にも自然の發動的進向を爲さしむるものであります、之を我國では太古より尊稱して天の御中主神と申します、然るに或人は神と申すのは人爲的宗教より出でたるものとして之を信するは迷信なるものと云へども其は大ひなる誤謬にして神は總ての發動の本元、換言すれば靈動靈活の本元にして若し大神靈なきときは總てが死して宇宙は眞の死空とならねばなりません、宇宙は決して死空なるものでありませんから神の靈力を尊信するのみならず總てに之を靈用せねばなりません。

第五節 大靈魂の發達期 第六段

大靈魂とは大神靈に對して自發的に活動せらるゝ靈力であります、精言すれば大神靈は眞天より現れ、大靈魂は眞地より發動すべき靈力であります、是れ取りも直さず眞天真地の感合にして萬事萬物を和合發達せしむる大本元なるものであります、又吾人の靈魂も此の段より來るものであります、加之ならず其他生物の生命に付ては此段に關係せざるものはありません、生物學に云ふ所の元形質と云



ふものも此の關係を有するものであります。

第六節 大真理の發達或は物質原素の關係 第七段

眞理は眞天地の大神靈と大心魂及び物質の原素等總てに關係する一定の規律法を云ふのであります。故に宇宙間に存在する所の物質的物体に於ては眞理に依るにあらざれば之を利用することは決してかなひません、何となれば總ての物体は眞理の法則によりて或は集りて形体を成し或は散して形体を失ふが如くに何者にては眞理の支配を受けざるものはありません。

第七節 天体の構成期或は星期 第八段

總ての物体は顯微鏡を持つてするにあらざれば見ることの出來ざる細分子より成立ちしものにして、此の地球又太陽の如きも最初は霞雲星と稱する至熱の瓦斯体より漸次冷却して遂に流動体となり、尙は冷却して薄き地殻を生し尙は段々冷却して遂に堅固なる地殻を生して其外表面を包める瓦斯も清明となり氣候も溫暖となりて生物繁殖する様になつたのであります、星學者の説に、我等の住居する地球は五星期の中葉にして太陽は三星期に屬するものと申されます、是れ神靈心魂眞理の三体一致の靈力に依るので斯の如くに循環するのであります。

第八節 天体と地球の成功 天之常立とも申す 第九段

此の段は世に云ふ所の天地開闢の期にして此の地球此の太陽が成功せられたのであります、換言すれば此の地表に生物をして繁殖せしむるに適應する様になつたのであります、故に此の地表生物の爲めには天地の開闢と云はねばならないのであります、但此出來事は宇宙の大に比較すれば千里の原野に一本の草木が生したより尙は微少なるものと申さねばなりません。

第二章 開世關 此世の開闢或は發生門とも云ふ

此の章は此の世の開闢より神器の世の終るまでの關係を述べむとするので吾人々類に於ては最も大いなる關係を有するものであります、然れども此の地球此の太陽の變遷に屬する天地の開闢と眞天地の開闢何如と混しては成りません、何となれば眞天地は無形にして始終あることなし勿論開闢のあるべきものではありません、故に此の天地の開闢と云のも此の太陽此の地球の變遷にして只生物の生活に適合する様になりたのみで別に異なることのないのであります、又生物の生まるゝと云ふのも其の通りで大心魂が大神靈の感應と大眞理の活動によりて生するので即ち元因ありてそれから變遷するまでのことでありませす。



### 第一節 天然の世の第一紀生物の生殖適應時代

地球の表面は自然の溫和と清明なる空氣を得て生物繁殖に適合するやうになつたので之を生物の樂土と申します、日本古代史にては之を國之常立神時代と申します即ち自然の適稱である故に此紀に至るや生物始めて發生致したのであります、併し最初の生物は甚だ微少にして微菌の如きものより次第に發達したることは進化論の原理に異なることはありません、然れども其の微生物を爲す本原は何より來るものかと云ふに矢張幽玄の第六段大心魂の發動力が眞理の活用によりて此の世に生じたるものであります。

### 第二節 動植物繁殖時代 天然の世の第二紀

地球此の期に至れば愈々發達して植物も動物も大に繁殖して高等動物又は人類の祖先も或は現はれたものでありませう、而して此の時代には最も進化法が行はれたるものならん、何んとなれば植物にても動物にても若かき時は進化的に行はるゝものにして年老れば退化と云ふより多少退化に變するものであります、殊に此の時代の進化は胎内的進化なれば今日に比すれば過大でありましたことは疑ふべからざる事實であります、實に母の胎内にありし時の進化は發生後の進化に比して甚だ大なりと同一

なる理であります。

### 第三節 人世樂土建築時代

此世の人類漸く發達して遂に人世と云ふ樂土を自然界に殊別に建立する様に成つたのであります、我が神代史に於ける高天原の神事業も此の紀に於て行はれたるものであります、又人の進化には二様の進化法が行はれたるものにして進化論者の云ふ自然淘汰の法則のみに依りて進化したるものにあらずして大神靈の靈力と心魂の發動力と眞理の融和によりて進化したるものが最も多大なるものと確信せられます。

### 第四節 君主獨裁時代

此の段は人事の世の第一紀にして天然の世の大家庭教育を離れて總てを人事的に修行し始めた時代であります、即ち今日より五六千年前に王國時代が始められたると歴史が證明致します、其れは最初の人類が他動物に打勝ち並に荒蕪地を開拓して遂に人世と云ふ樂土を建設せられ尙ほ進歩して王國と云ふ國家を建立する様に至つたのであります、然るに天然の世より人事の世に進むには大關門がありて之を通過するには非常なる困難があつたのであります。



此の段に於ては人世は恰も小學時代の小人の様なもので天然の世の家庭より人事の世の小學校に入學したやうなものであります。

#### 第五節 人爲宗教時代

此の段は人事の世の第二紀にして世が天然の世より人事の世に移る君主獨裁時代に成ると共に天然の世の自然教法を破壊したるものゆゑ世の心情が安心する所なきより種々の偶像的卑劣なる動物などを拜する様になつたので釋迦基督の如き聖人出で、神靈に屬する教を設けられたのであります、然れども人爲宗教のかなしさには他の教へを破壊して自立せねばならないやうになつたのであります、是れ恰も中學校のやうなもので中年的半開時代には是非必要なる教であります、然れども既に大學的文明の世に到達すれば中學の必要なきが如く世の進歩するに従ひ人爲的宗教の必要はありません、殊に科學時代の今日には尙ほさらの事であります。

#### 第六節 科學實業時代 世の大學校に比す

世は段々進歩して獨裁政事や獨斷的宗教のみに満足すること能はずして經驗と學理と事實とを主とする科學時代を迎へたのであります、是れは西洋では紀元十八世我か日本に於ては明治維新の大改革以

後の文明時代を云ふのであります、恰も人世は大學教授の位置に居りし如きものにして之を大學時代とも申します、然れども今日は此の時代を殆ど卒業したるものなれば科學時代も當に終りを告げんとする現在今日の過度時代に到來したのであります。

#### 第七節 神器の世の第一第二第三

此の段は正に來らんとする時代にして之を精言すれば人世は人事の世の第一即ち小學その第二即ち中學その第三即ち大學の人事の事業を大略卒業して再び天然の世の大本家に歸る其正統を繼續して新たに興るべき世即ち神器の世に到達するのであります、夫れ此の世に到達することは唯に高天原の神事業を繼續するのみならず、人事の世の政治宗教哲學科學等の總てをして眞知眞勇眞善に至らしむるものであります、誠に此世にして之れに至らしむるにあらざれば今日の如く大複雜大混亂なる世を回復することが出來ないのであります、而して此の世にも第一第二及び第三の三紀がありまして遂には西教の理想せらるゝ全知全能純善なる眞神の世に到達せらるゝのであります。

#### 第三章 人世に於ける眞の圓滿

此の章は遠く未來の世の理想にして世は物質的眞の文明の頂上に至る之を神器の世の終りと申さねば



なりません、而して世は精神的文明或は圓滿的文明の絶頂に到達せねばならないのであります、但し世としては此の時代に至るは甚だ遠しとするも吾人一生の間には此の時代は必ず來るべき筈のものであります、孔子の曰はれたるが如く即ち心の欲する所に従つて矩を踰えずと斯の如き時期は何人にも必ず來るべきものにして之れなきものは人の人たる甲斐のない人でありませぬ、換言すれば聖人となり神人となりて此の世を終らねばならないのであります。

### 第一節 精神的眞聖時代

物質的外形の文明は何程發達すと雖も精神的文明の之れに伴ふにあらざれば心の圓滿を求むることが出来ません、如何に高位高官有福の身を持つと雖も心に圓滿なきものは實に不幸なるものであります、加之ならず外形上の進歩は絶頂に達すれば必らず限りあるものなれども精神上の進歩は無限にして此の世の終りまで絶えず進歩するものであります、而して此の世にも第一紀第二紀及び第三紀がありまして級を進む毎に精神的發達も大に進歩するものであります。

### 第二節 精神的眞神時代

此の時代は眞聖の世より尙は大に進歩したる世にして身体も靈魂も全く宇宙の大神靈に感應して何事にも楽しくて難有くて神の境遇に楽しく生活せらるゝ世であります、換言すれば精神にも身體にも行爲にも神靈や精神や眞理が充満して唯神と共に樂園に遊ぶが如く又精神と共に天地をも感應せしむるが如くの精神力を有するのであります。又神理と共に宇宙を通行するが如き人々の精神が神力自在になりし世を云ふのであります、又此の世にも第一第二第三紀がありまして級を進む毎に世も益々楽しくなるのであります、人間一生にも此の時期が必ず來るので誠に精神を修養し神靈に感應して眞理を活動せしむるときは必ず此境遇に入らるゝものであります。

### 第三節 神事業を成し終りて天に歸る時代

此の段は成就の世の第一にして世の總てが神事業を成終りて天に歸へり天ツ神に復命せんとするの時でありませぬ、是れ圓滿の極度にして實に幸ひなる時と申さねばなりません、併し又他の一方より思考するときはあはれはかなき時の様なれども決して左様ではありませぬ、何んとなれば完全なる終りは非常に歡迎せらるゝのであります、再言すれば人世の終りを全うするので之れより喜ばしき時はないのであります、加之天地は愚か此の期は何人にも來るものにして吾人々類は是非とも此の期を迎へねばならないのでありますから常に精神を修養して大眞靈に感應し眞理を活用するにあらざれば終りを全うすることが出来ません、此の期に臨んで後悔するも如何ともすることが出来ないものであります。



ゆゑ尤も大切に常識的に三種の神器を修養せねばなりません、而して此の紀にも第一第二第三紀がわ  
りまして級を進むことに死後の未來が深く樂まるゝ様になるのであります。

#### 第四節 死と云ふ大難關に就ての觀念

死と言へば此の上もなき困難には相違なけれども其實は靈界より來りて又靈界に歸ることであるゆゑ  
左程困難なる筈のものではありません、加之ならず子孫を殘し榮光の御靈を遺して大神靈界に歸るこ  
となれば實は幸福にして愉快なることであります、故に榮光の人には死は決して憂ふべきものではあ  
りません、然れども之を再三講究するときは死程かなしくして残り惜きことはありません、何となれ  
ば常の旅立にすら住み慣れし家を離るゝ時には唯何となくかなしくなるのであります、況んや生れし  
より以來一處につれそふたる此の身體と分かれ妻子親族と別れて歸へらぬ里へ旅立するのであります  
からはかなしくなくてなんとしませう、特に人類は精神の外に神靈の感應を有し又真理を靈用する所  
の靈動物でありますから此の身體を愛し此の妻子を親しますに居られるものであります、然れども  
斷念せねばならない時にはいさぎよく斷念せねばなりません、斯くの如きものなるがゆゑ吾人人類は  
世界に住居する間に榮光の御靈を養ひ又子孫を養育して此の世をして眞知眞勇純善に到達せしむる所  
の大責任を有するものなりとして光陰を無益に過ぐしてはなりません。

#### 第四章 閉世關を越えて靈妙に入る事

此章は死後の未來及び世の終りの未來を理想せしものであります、然しなから死後の未來を述べむと  
するは至難なることであります、何となれば吾人は世の終りの未來は勿論、死後の未來に直接的の  
通信して其事實を探究することが出来ないからであります、然かれども吾人は死後の事實や世の終り  
の有様をも講究するに由縁なきものではありません、實學すれば吾人が信する所の大神靈は始終なく  
生死なきものであります、又自ら信する所の靈魂も無生死無始終のものであります、又吾人が靈用す  
る所の真理も其通り無始終であります、殊に宇宙の大真空には造作主もなければ變遷もなきものにし  
て無論生死始終のあるべきものではありません、又物体の本原細分子に於ても無始終無生死にして變  
遷もなく又増減もあらずと云ふ、斯の如く總ての本原は無始終なれば生死とか世の終りとか云ふもの  
は唯ある状態の變遷にして其の變遷すべき理由を究むれば其の状態は自ら明瞭すべき筈のものであり  
ます、故に此の章は其の變遷の本原によりて其状態を講究せんとするのであります。

#### 第一節 靈妙の第一段真理の始末

此の段は天体の終局にして此の地球此の太陽も遂に死物となりて大變遷を起し破壊せられて又新星を



構造する材料に供せらるゝものなりと申されます、人間一生に於ても靈魂元に歸すれば體殻のみ、此の世に残れるものでありますから是非之を始末せねばならない様なもので天体も死すれば眞理が之を始末して遂に新星の材料とならしむるのであります。

#### 第二節 靈妙の第二段物体の審理

審理と云へば閻魔王の審判の様に聞えるか知れませんが、一物一毛たりとも物の終りには眞理の審判にかゝらざるものはありません、況んや世の終りに於て何物なりと雖も一度本原の細分子即ち顯微鏡によるも容易に見ることの出来ないもので歸へして再度天体及び萬物を新造すべき材料となるのであります、斯の如きものゆゑ吾人は何事にも又何時に於ても物の終りを慎まねばなりません、糞尿は穢れたりと雖も之を田畑に用ゐれば新穀物の材料となり、塵芥も家屋の内外にあれば汚なきものなれども之を野外に持出して堆糞とすれば農家を益するが如く、物体の終りには自然の審理と共に人事の審理をも用ゐねばならないので是れが天然自然の經濟法にも適ひ葬禮法にも適應するのであります。

#### 第三節 靈妙の第三段生靈に關する審理

宇宙間には生物の住居する此の地球の如きものは幾千萬億あるか數かぎりもなきものにして復活に屬するものは天津神の靈審によりて地球に復活せられたるものであります、又神靈榮光の上境にも向上せらるゝ靈もありませう之を天津神の生靈に對する審理法と申します、又吾人が死者の靈に對する處分法がなければなりません、即ち祈念祭の如きは是非いとなまねばならないのであります、もつども鎮靜の御靈と榮光の御禮に對する禮祭を區別せねばならないのであります、何となれば榮光の御靈は此の世にさかえ給ふ、御靈鎮靜の御靈は宇宙の大真空に靜まり給ふ御靈なれば之を祭るには自ら區別のあることでもあります。

#### 第四節 靈妙の四段神靈榮光の清淨界

實に此の段は靈妙不可思議の清淨界にして總ての靈魂の歸入する所であります、此の所は大心魂の集合せらるゝ靈界なれば現在の物界の状態とは全く異なるもので惟神靈の感應によりて云ふべからざるの樂みがあると思ふよりはか何にも思念することが出来ません、吾人此の世に於ても神靈に感應するほど清淨にして樂しく心よきものはありません、何となれば物質上の樂みには必ず苦みが伴ふものなれども眞理上の樂みは決して苦みが伴ふものではありません、亦た眞理より得らるゝ幸福も其の通りであります、又第五段も第六段も榮光の神靈界にして唯々進むことに靈能感應の進むと申すより何に



も云ふとは出来ません、尙ほ又第七第八第九は靈妙不可思議にして尙ほ又何とも申すとは出来ません。

## 第二編 眞神

此編は眞神の靈能の事に就て大意を述べんとするのであります、即ち眞神は靈体にして信するものみに其神徳を得らるゝものと言へば茫漠たる説の如くなれども是れ人たるもの、殆ど常識的に行はるゝ眞理の規定にして、人民相互の交際すら信用なきものは一日も安心すること能はざると均しきものであります、もつとも知的疑ひの如きは信仰の反對なるが如くなれども是れは道理を以て信用を錬熟せしむることにして反て科學的原理を發揚することがあります、故に知と道理を以て疑ふのは迷信するよりは幾十倍の價直があるものであります、兎に角信仰と云ふべきものは物質的のものでなくして精神的靈能的のものでなければ誠に人世を幸福安全ならしむることが出来ません、換言すれば神靈と精神と眞理の靈動に依て眞の信仰が始めて得らるゝものなれば先づ眞神の靈力より講究して眞の信仰を高尚ならしめねばなりません。

### 第一章 神の種類と信仰に就て

眞神と申せば宇宙の大真空に在す天之御中主と申す、大靈より外にあるべきものにあらざれども其は大元の眞神にして此の外に心魂の榮光的動作によりて生ずる神あり之を榮光の御靈と申します、



御靈は人類の形体を受けたる人の靈魂が宇宙の大神靈に感應して精神及び行爲に現はるゝ御靈であります換言すれば宇宙の大神靈は靈感なるが故に物体には直接に感應せられずして必ず人の靈魂に依りて靈動せらるゝもので其靈魂と眞神靈の和合によりて生じたる御靈が取りも直さず榮光の御靈と申すのであります、即ち此の靈によりて經營する事業を神事業と申します、大古天然の世に於て衆の神達が相集りて此事業を行ひ給ひたる場所を高天原又は神代と申したのであります、今日と雖も國民の總てが宇宙の大神靈に感應し榮光の御靈となりて其行ふべき事業に従事すればそれが取りも直さず高天原又は神代の神事業と申して宜しいのであります、斯の如く宇宙の大神靈天之御中主神と神代の神々達とに區別があるのであります、尙ほ人皇以來の多くの神々は勿論招魂社即ち靖國神社等の如きも榮光の御靈を祭りたるもので即ち神代の神と同種の神でありまして唯榮光の動作には大小の差があるのみで皆榮光の神である事を信せねばなりません。

第一節 宇宙大神靈に對する感應の始め

實に宇宙の大神靈は靈にして始終なきは勿論總てに關係せらるゝがゆゑに總てに感應せらるべき筈のものなれども左にわらず精神を開發して信するものにわらざれば感應なきものであります、故に他動物は愚か人類と雖も精神的開發の鈍さのものには感應の力甚だ弱きものであります、是を以て之れを考

究するときには大神靈の感應は此の世界開闢と共に開けたるものにあらずして人類の祖先が自己の精神を開發して宇宙の神靈に感應したる時に始めて開發せられたるものと申さねばなりません、而して其時代は確と推理することは出来ませんけれども、多分天然の世の第三紀の中頃にありたるものなりと思はれます(其理由は他日精細に講究せんと思ひます)是れが取りも直さず眞天地の開闢にして此頃より人世は非常に進化し始めたものと思はれます、換言すれば人類は精神的眞天地の開闢より身体も精神も全く別物となつて進化するのみならず人世と云ふ樂土を建築する様に至つたのであります。

第二節 大神靈は靈魂の父たること

宇宙の大神靈と云へば遠きものゝ様なれども自己の靈魂より云へば父母の如き甚だ相近きものであります、然れども精神をけがし靈魂を蔑みするが如きわらば大神靈に甚だ遠ざかるのであります、故に神靈を信し神靈に近かつき神靈に感應することは死後の未來や靈魂の福祉をのみ祈願するものにはわらずして現在此の世をして眞の平和眞の幸福眞の安全ならしめんが爲めであります、又た大神靈に近づき或は感應すると申しましても決して六ヶ敷ものではありません、惟靈魂の父として觀念すれば父母の如くに毎日に感應が來るのであります、唯大切なものは精神の修養であります。

第三節 精神の修養は眞理を以て行ふべきこと



精神を修養するには眞理を以てするにあらざれば靈魂の發動力を起して大神靈の感應を明かに得ることが出来ません、何となれば大神靈と眞理及精神とは三体一致の協力あるものにして眞理を以て養成したる靈魂にあらざれば大神靈に感應して三体一致的に協力することが出来ないのであります、然しながら眞理を講究すると申しても總ての科學哲學を研究せねば出来ないと云ふのでなくして惟三種の神器を靈用すれば自ら眞理が明かに實用せらるゝのであります。

第四節 榮光の神及び榮光の功績を明瞭ならしむること

榮光のイサヲシは大神靈の感應力に依りて成りしこと明かなれば榮光の神の此の世を守護し此の世を感化せられたることは實に大なるものであります、何となれば大神靈の神は心魂に依りて感動を與へらるゝものなれども榮光の神は精神的行爲即ち教育によりて或は榮光的國風に依りて或は通常の修行によりて或は清き遺跡によりて人世界を向上ならしむるものであります、故に此神々の功績を明かにして吾人は之れに習ひ其の功績を行はねばならないのであります、精言すれば天照大御神の事業即ち眞知眞勇眞善に習ふのであります、小別して言へば楠正成の忠義に習ふのであります、又日本武尊の勇功に習ふのであります、斯く申すも吾人は古へをたつとびて今日を申めるのであります、今日より明日明日より明後日と次第々々に全知全能純善なる眞神の新國に進化せしめんが爲であります。

第五節 信仰と神習の區別

大神靈を信じ大神靈に感應するのは大神靈の大靈力を得んが爲めなり、榮光の神を信ずるは其榮光に習ひ榮光を師として自ら榮光を行ひ榮光を輝かせんとする爲めであります、故に榮光の神には祈念祈禱して福祉を得んとするも得らるべきものではありません、唯之を師として之に習ふのみ之を尊信するのは其榮光を尊信するのであります、然れども大神靈の神は祈念祈禱且禮拜すれば自然に其感應のあらはるゝものであり又福祉も與へらるゝものであります、もつとも信仰神習の事は宗教事業に於ては最も重大なることにして一朝一夕に容易に説き盡し難きものなれば他日を待て論ずることにいたしませう。

第六節 總ての神は人世のみに靈動せらるゝ事

宇宙の大神靈も榮光の神も人類世界のみに精神的靈動せらるゝものにして他の動物界には決して精神的活動せざるものであります、何となれば禽獸には大神靈に感應する丈けの精神を持ちません或は多少其の精神を有するとするも是れに達するまでに修養することを知りません、實言すれば大神靈の靈動的眞天地の開發は人類世界のみに開發せられて他動物界には未だ開發せられざるが故であります、恐らくは今後數千萬年を経るも他動物界には眞天地の開發せらるべき時運は來るべきものであります、故に人と他動物とは全く異なる境遇のものであります。



第七節 眞理を利用して進化するものは人類社會あるのみ

眞理は宇宙の萬物に一般に關係して萬物之に支配せられ服従すべきものと雖も眞理の原理を究め眞理を利用して物質的幸福を製作するのみならず、無形に屬する種々の神靈的福祉を靈作するものは人類のみである決して人類以外にあるべきものではありません、果して其眞理を利用するものは何者かと云ふに取りも直さず吾人が靈魂にして其眞理を利用する様に至らしめたるものは申すまでなく宇宙の大神靈の靈力より外にはありません。

第二章 大神靈の靈力

此の章は神の靈力即ち感化力に就て再三述べむと欲するのであります。何んとなれば人事の世は天然の世に續いで基創せられたるが如く天然の世も又神器の世も其の本原をたゞせば總てが神の靈力より來るものにして若し人世界に此の靈力なきときは人世に精神的發達は決して行はるゝものではありません、換言すれば眞理を利用することも心魂を修養することも盡く大神靈より教育せられたるものにして誠に太古眞天地の開闢より今日又は此の世のあらんかぎり絶間なく訓練せらるゝ所の無形なる眞の大教育者であります。

第一節 神靈は無形の大技術者に均しきこと

進化論者の云はるゝが如くに人為淘汰の著しく功績の現はるゝとは人世が文明的に進歩すればする程盛に行はるゝのであります、其れは人と云ふ神靈的動物が靈力を以て未だ靈能に感化せざる動植物を訓練するからであります、或る技術師は熊や虎や獅の如き瘴猛なる獸類すら飼馴らして彼等に角力や藝業を爲さしむるものは彼等自然の天性にはあらずして人の靈力が加助するからであります、若し彼等天然動物をして天然の儘に任せ置かば決して斯の如くに馴和せらるべきものではありません、而して人類の精神も眞天地の開闢以來一度大神靈の感應を得るや彼等は獸類が技術者に訓練せらるゝが如く遂に神に均しき神事業を行ふ様になつたのであります、之を無形の大技術者と申すのであります。

第二節 神靈は無形の大宗祖者たること

神靈は無形の大祖宗即ち大宗教の大説教者であります、實に高天原時代には宗教もなければ説教者もなし惟宇宙の大神靈が時々來りて祖宗の如く慰安を與へ懇切なる教を感應的になされたものであります、斯く申せば妄誕不稽説の如く思はるゝかも知れませぬが精神を養ひ心を心の本体大心空に歸して大神靈を求むれば必ず來りて教導せらるゝのであります、此の如く人世は太古より佛耶教に萬々倍も



勝れたる直覺的大宗教が開發せられてあつたのであります、實にかゝる大宗教を除けて佛耶教に従ふは迷蒙の甚しきものと申さねばなりません、故に人たるものは人爲的宗教を速に撤去して眞の宗教に従はねばなりません、此の如く人世には大宗教主即ち大神靈が在し給ふから無爲にして治且善化ならしむると云ふ神器の世や眞聖の世が必ず來るのであります。

### 第三節 神靈と精神の親和力並に神爲淘汰

神靈と精神の通路一度開通せらるゝや絶えず通行して親和愈々緻密となりて遂に人類をして今日の如くまでに感化せられたのであります、換言すれば神靈と精神の道開けて精神は神靈によりて養はれ又た神靈は精神の修養によりて靈力を現し給ふと云ふ様な割合で益々人類社會に神靈的感化力が行はれたのであります、斯の如く感化が行はれたればこと猿の如き獸類より萬物の長たる實證を示す所の文明的界にまで進化したのであります。即ち是等の進化は自然淘汰でもなし又人爲淘汰でもありませんから進化論の語をかりて神爲淘汰と申すのであります、換言すれば人類社會の著く進化したるものは自然でもなく人爲でもなく神靈的感化力に依れるがゆゑであります、再言すれば自然淘汰が進化するの爲淘汰が著しいのと申しましても人世に行はるゝ所は神爲淘汰程大いなるものはありません、而して此の進化力が獨り太古天然の世にのみ行はれたるものにわらずして現在も未來も益々さかに行はるゝものでありますから實に大切なる神力があると申さねばなりません。

### 第四節 神爲淘汰の最も經驗し易きこと

進化論者の唱へらるゝ自然淘汰の行はれることは疑ふべからざる事實ではありませう、然れども之を經驗して實際を解決せんとするには學理的智識と共に長年月を費して研究するにあらざれば容易に之を得ることが出来ません、又人爲的淘汰も自然淘汰に比して實際を観察するに稍易きが如くなりとも雖も熱心なる専門家にあらざれば精しく實驗することが出来ません、然るに神爲淘汰のみは何人にも日々に行ひ實驗せらるゝ所のものにして時々是れが結果を確認する事が出来ます、例舉すれば昨日まで邪見なるものも今日は善人となる又墮落の人も大に改まることのあるが如く、總て人世の進歩は神爲淘汰に依らざるものは一つもありません、併し神爲淘汰は人類の精神のみに行はるゝものにして他動物界には決して行はるべきものではありません、又人爲淘汰は人類が動植物に對して行ふものにして動植物自ら行ふことは出来ないのであります、又自然淘汰は天地萬物一般に行はるゝものであります就中神爲淘汰は人類社會に於ては最も大切なるものにして最も有益に最も大いなる靈力を有するものとして個人は勿論國家も世界も是非是れに淘汰せられねばならないのであります。

### 第五節 人爲的宗教は神爲淘汰に反すること



佛教や耶蘇教の如き人爲教は神爲淘汰を無理に人爲的に行はんとするが故に神爲淘汰の發達を妨害するのみならず、人類社會の發達を大に減殺するものであります、何となれば彼等が神爲淘汰を大に誤解して精神界と神靈界の通路は釋迦又は基督が開作したるものとして佛教或は基督教に淘汰力があつて總ての人類は佛教或は基督教によるにあらざれば善化すること能はずと斷言して無理に神爲淘汰を人爲的に結ばんとするから勢ひ人心を束縛せねばならぬやうになつたのであります、實に此の如き我儘勝手なる誤解はありますまい、前にも申す通り神靈と精神間の通路は眞天地の開闢と共に開通せられたるもので決して釋迦や基督を待て開通せられたるものではありません、又神爲淘汰も神靈と精神の間にありて即ち眞天地開闢以來絶えず行はるゝものにして佛教や耶蘇教の如く人爲的宗教内に於ては眞實に行はるべきものではありません、此等の理由によりて人爲的宗教は迷蒙の甚しき教へと申すのであります。

### 第三章 榮光の神の活靈

神靈の神は直接吾人の精神に感應を與へらるゝ神なれども榮光の神は道理を以て精神的に吾人を感化せらるゝものであります、もつとも其本元は神靈の感應によりて生じたる神なれば人世をして神靈的に進化せらるゝ神であります、故に神靈の神に次で此の神の事業に習ひ之れに感化せられねばならぬのであります、何となれば世の進歩するに隨ひ榮光の神の靈活的な事業によるにあらざれば榮光的さかえの世に進化することが出来ないのであります、實言すれば榮光の神とは榮光的行爲の事業のことにして身体は人間なれども精神と行爲が榮光でありますから榮光の神と申すのであります、故に榮光の精神を有する人榮光の行爲あるものは總て之を榮光の神として此の章に於て之れを説明せんと欲するのであります。

#### 第一節 榮光の神の紀元

眞理と事實を以て講究するときには榮光の神の發生は即ち精神と大神靈との和合せられた時にして是れが取りも直さず人類世界の開發の時であります、其の以前の物質的進化の間は所謂人世は胎内の進化にして恰も人間が母の胎内にありて一滴水より完然なる人体となりて發生するが如く人世の最初も胎内の進化がありて然る後ち人世と云ふ樂士的世界が開發せられたのである、進化論者は人類の祖先は猿の如き動物より進化したりと云ふのは取りも直さず胎内の進化の事實を以て講究するに過ぎないのであります、然れども實際に論ずるときは獸類の如きものは人類社會の祖先にあらずして其は胎内の進化の状態のみ試に申しますれば人類社會の眞の祖先は榮光の神々達より外にはありません、我神代史では伊弉諾伊弉冊を始めとして八百萬の榮光の神あり之を榮光の神の紀元と申します。



第二節 榮光の神の最初の状態

榮光の神と申しますれば光明赫耀として仰ぎ見ることも出来ざる程の状態かの如き感なきにあらざれども左様なる譯ではありません、何となれば精神上の赫耀は兎に角人工的物質上の進歩は古代程粗にして世の進歩と共に精密に至りたので太古の状態は決して今日より勝れたるものではありません、惟精神のみは實に光明赫耀たるものにして實に物質的文明の進まざる程精神が光明赫耀するのは榮光的精神の人には覆ふべからざるの事實であり故に其の行爲の總てが榮光事業となつたのであります、換言すれば太古の神は榮光の精神を有して榮光の行爲をせられたので後人之れに習ひ之を規範としたるがゆゑに實に榮光の精神や榮光の行爲は人世にのみ行はれて他動物には行はれざるものである、かるがゆゑに人世の事を論ずるにも神事業の事を論ずるにも他動物と人間と混じては決して明かなる講究は出来ないのであります。

第三節 榮光の神の性質に就て

榮光の神の性質は人類の靈魂と大神露の和合によりて生れたる精神的御靈である故に此の御靈は其人が死すると共に此の世を去るべきものにあらず必ず此の世に存在して宇宙の大神靈を補佐して榮光の

益々隆昌ならん事に盡力し給ふ神であります、是れ實に太古神代の人々のみにあらずして現在吾人と雖も此精神を存有して居るのであります、換言すれば榮光の御靈は天照大神の御精神を初めとして今日までの榮光的總ての精神が世と共に存在して人世を守護し給ふのであります、又榮光の神は鎮靜御靈の如く幽冥界に静座し玉ふのではありません、精言すれば榮光の御靈は無形の子孫にして此の子孫が正しく繁昌するにあらざれば神器の世に到達することが出来ません、故に人たるものは有形の子孫より無形の子孫を先に繁殖させねばなりません。

第四節 榮光の神の禮拜及び祈念

我國の神社は總て榮光の神即ち神代或は人皇以來の榮光の御靈を祭りたるものにして眞の大神靈を祭りたるものではありません、其の社毎に入幡社とか北野社とか多々の社名は異なりてありと雖も性質に於ては同じく榮光の神靈を祭りたるものにして決して異なるものではありません、然れども神禮拜の順序より云ふ時は第一宇宙の大神靈天之御中主神又榮光の神としては天照大神を第一とし次は思兼の神素盞雄の神を拜して後銘々が思ひくの神を禮拜するを順とす然し大神靈以外の神は敬禮するは勿論のことなれども唯敬禮や祈念のみにては其利益を得ること能はずして之に習ふにあらざれば眞の信奉ではありません。



## 第五節 鎮靜の御靈及び其祈念

人類界は特に形体的子孫と靈体的子孫を此の世に遺して死去するのであります、死去とは靈魂が体殼をすて、宇宙の本体大真空に歸る御靈を云ふので是れを鎮靜の御靈と申します、宗教哲學の大に注目する所は此の御靈であります、然れども靈体的子孫即ち榮光の御靈の健全なるものを遺して死するものは歸するが如く安然なるものと雖も靈体的榮光の御靈を遺さざるものは死するとも此の靈魂が安然に鎮座することが六ヶ敷いのであります、之を迷ひ御靈と申して此の御靈が世を五月蟬ならしむるものなりと申します、故に吾人は此等の鎮靜御靈を誘導して宇宙の大真空に歸せしめざるべからざるものなりとす之を眞の御靈しづめと申します。

## 第四章 真理の需用

真理は天地の活きたる規定にして宇宙間にありとあらゆる總てのものは真理の支配を受けないものはありません、然れども真理を活用して之を利用するものは獨り人類のみにして他動物には未だありません、人類中に於ては精神と神靈の感應力に豊かなる人程之を深く信じて廣く實用するのであります、加之らず尙ほ之れに加ふるに三体一致の真理を以て精神を養ひ大神靈を信仰するゆゑに自らに神靈精

神及び真理の三体一致の靈用が行はる、様になるのであります、故に何事にも神靈精神真理を三体一致的に靈用せしむるが人の人たる本分を盡すことにして是れが取りも直さず真理を眞に靈用すると云ふのであります。

## 第一節 三神一体の活動

三神とは大神靈の神榮光の神真理の神であります、語を換へて之れを云へば神靈の靈力精神の活動力、真理の審判力が是れであります、此の三方が人世界の基元を爲して居るもので人事總ての進歩は是れより發達したるものにして是れに深く基據するものは繁昌し然らざるものは衰退するのであります、然しながら真理を神と云へば哲學科學の元原を無理に神視する様な嫌ひなきにあらざれども決して哲學科學の真理を奪はんとするのではありません、換言すれば真理を真理として單獨に働かしむるより一段進んで真理と神靈と精神とを一致協力せしむるときは真理は真理でなく活きたる神の働きを爲すのであります、此を以て真理を神と云ふのであります、然るに哲學科學は真理を單獨に活用せしめんと欲するゆゑに真理は真理にして神の靈力に一致協力することも出來ず又神的活動することも出來ないものであります。

## 第二節 天地人の三中庸



天には天の中庸あり即ち靈の中庸にして之を天之御中主神と云ふ又地には地の中庸あり即ち精神の中庸にして之を自我の本体と云ふ、尙ほ人には人の中庸あり即ち道理の中庸にして過不及ない様にする方法を云ふのであります、古へより學者達は人の中庸に重きを置かれたりと雖も天地の中庸を尊信せられざるは残念なことであります、是れ人の中庸は天地の中庸に基くものにして天地の中庸に依るにあらざれば眞の中庸とならざることを了知せざるからであります、又或宗教の如く自我の中庸のみを見て理の中庸と靈の中庸を見ざるものもある此の如く天地人の三中庸の中庸を完全に靈用して中庸の中庸たる眞の中庸を悟覚する人は甚だ少くないのであります、故に神器的に精神を修養して天地人の三中庸を明瞭ならしめねばなりません。

### 第三節 宗教的信仰と道理的信仰

人為宗教の目的とする所は神靈を信仰し又は自我を開悟せしめんが爲めならん、然るに何によりて是を信仰するかと問へば釋迦或は基督に依れよと云ふ是れ人心を束縛するの甚しきものと云はねばなりません、何となれば釋迦も基督も人なり人が人に絶對的に依頼すべき理由はありません、故に彼等は其誤謬を速に撤去せしめて道理によりて神靈を信仰し自我を開悟せよと教へる様にならねばならないのであります、換言すれば道理によるにあらざれば神を信じ自我を開悟せんとするも眞の信仰眞の開悟は決して得らるべきものではありません、然るに道理に依るものとすれば唯に宗教のみならずして哲學にも依るべし又科學にも依るべし又自ら行爲したる所の精神的神器の修養に依りて神を信じ自我を開悟すれば自ら明瞭せらるゝものである之を眞の信仰と申します。

### 第四節 神信仰と學術

科學時代の學者は宗教的信仰を愛望せざる如く見ゆるも是れは束縛的獨斷的盲從的信仰を嫌ふのでありて眞の信仰を嫌悪するのではありません、實言すれば神靈を信じ自我を開悟するのは學術をして愈々高尚ならしむることにして同時に自らも高尚となるのでありますから神信仰は第一番に學術界に行はれねばならないのであります、換言すれば自我は自己の本体にして之を信するの信せないのと云はるべきものではありません、又大神靈は自我の父なれば之を信じないと云ふのは眞理が明にならないからであります、若し道理明かになれば自己の父母を信するの信じないと云ふが如き失體は決してありません、此の如きは自己の尊嚴を損ずるのみ故に知識を發達せしめんと欲せば自我の發動力と宇宙の靈力と眞理の實用を明かにして之れと一致協力せねばなりません。

### 第五節 人世社交的信仰と道理的信仰

現在社會の一番大切にして一番に必要なものは人世社交的信用であります、而して此の信用を完全



ならしむる爲めには政府あり宗教あり教育ありて之に盡力するのであります、又人事總ての事務が信用を確實ならしむるのであります、然れども信用の根原を確實ならしめて修養したる信用にあらざれば眞の活動を爲さざるものであります、故に眞の信用を確實ならしめんと欲せば神器の修養法によりて之を養成するにあらざれば眞の信用を得ることが出来ません。

#### 第六節 一切の信仰一切の信用をして一致協力せしむる事

一切の信仰一切の信用をして一致協力せしむるには本元的復古に基因せざるべからず、其本元的復古とは人爲的宗教の媒介によらず直接に自己の眞我は勿論宇宙の大神靈に感應して眞理を靈用さへすれば自ら天地人の三大中庸も神靈榮光眞理の三大神靈も一致協力せられて大本元的に復古せしむるのみならず、神器の世に到達して榮光の事業を行ひ榮光の樂みと榮光のさかえを得らるゝのであります決して此事のみは間違はありません。

### 第四編 神ながらの統一

人世界は自然的動物界とは異にして靈にも精神にも眞理にも統一法なかるべからず、何となれば人世は自然に放任すると能はざるゆるる精神を養ひ神靈に感應するは勿論榮光ある事業を益々進歩發達ならしめて愈々堅固なる統一法を確實ならしめねばなりません、殊に人世の治亂は統一の如何によりて生ずるものなれば此の統一法こそ實に人世の大問題であります、換言すれば人には各々固有の統一心を有するものにして確實なる元因にあらざれば之に服従せずゆるるに世界各國共に統一法に困苦して居るのであります、獨り我が日本のみ高天原より傳來の統一法あり之れを神ながらの統一法と申します。

#### 第一章 圓滿なる皇統

皇統の事を申上るのは長きことなれども圓滿なる皇統を有する國と圓滿ならざる皇統を有する國と其の利害得失を擧げて其の圓滿なる原因は何處より來れるか果して其來る所ありとすれば圓滿ならざる皇統の人民にても是れを求むることが得らるゝか否やを講究せねばなりません、加之ならず宗教的系統變遷の關係に於ても圓滿なる統一法を有するものと然らざるものととは區別があるから之を明かにして講究せねばなりません。



第一節 神ながらの皇統

實に神ながらの皇統を頂きて榮光の働きを爲しつゝ、進歩する人民は獨り我國あるのみ、換言すれば我が皇統には神ながら即ち高天原の尊嚴と倫理道德的天祐の教理と政事統一の三大徳を有し給ふものがあります、世界各國共にいつれの皇室にても統治的權力は有し給ふものなれども惟神の神徳と天祐の倫徳を兼有し給ふ皇室は我國のみ故に我が皇室には宗教教育政治の三大教徳を兼備し給ふことを服膺せねばなりません、又畏くも我が皇室には宇宙の大神靈即ち天之御中主神の神靈的感應を其儘に有し給ふは勿論榮光の神天照大御神の御系統を承けさせ給ふものなれば一切の神靈的教法も榮光的神徳業も其の他道理的總てを統一なさせ給ふ御徳を有せ給ふことを奉戴せねばなりません。

第二節 天地の代表者 釋迦基督の關係

諸外國の皇帝は革命毎に易代せらるゝものにして政治のみを支配して其れ以上に及ぶこと能はざるがゆゑ釋迦基督を以て祖宗者として天地の代表者とならしめたのであります、換言すれば國王が天地の代表者たることができぬから據るなく之れを國王以上に置て尊崇を請けしめたのであります、之れを人爲的宗教と申して半開時代には必要の教でありましたが科學的開明時代には最早必要とせざる様に

なつたのであります、のみならず我國に於ては天成的の天地の代表者がありますから特更に耶蘇釋迦の如き人爲的祖宗を立つるの必要はないのであります、何となれば我國には神ながらの教あり神ながらの皇統あり神ながらの遺風がありますから返て彼等までも教化して行ねばならないのであります殊に今日の時代は高天原神ながらの總てを繼續して神ながら的に統一して進歩發達せしめねばならない時でありますから高天原惟神の統一こそ最も大切なことであります。

第三節 分業の必要なると共に統一の必要なる事

世の文明的進歩するに隨ひ分業の大切なことは申すまでもありません、然れども統一の極めがなくしては分業の利益を得ることが出来ません、換言すれば完全なる分業の行はるゝ國は完全なる統一を爲す丈けの知識を有するからであります、譬へば軍隊の砲兵騎兵歩兵輜重兵等の分業正しく行はるゝは元帥府の嚴重なる統一法があるからであります、斯くの如く人間界と云ふ樂土には嚴重なる統一法がなければ眞の幸福を製造することが出来ません、故に分業の利益を欲せば夫に適應する丈けの統一が必要であります、而して唯に統一は政治的事業のみならず萬事業總て常識的に行はるゝにあらざれば眞の分業を行ひ眞の進化を爲すことが出来ないのであります。

第四節 有形の統一



自然的統一は社會的或る動物にも行はるゝものと雖精神的知能並に靈力を以て行ふものは獨り人類世界のみにして他動物には決して行はるゝものではない、何となれば眞の統一は精神の發動力と大神靈の感應力と眞理活力の融合によりて成立するものなれば他動物の知力位では成立つべきものではありません、換言すれば人間世界と雖も精神力の弱き國神靈感應の薄きもの眞理の活動せざる所には完全なる統一は決して行はるゝものではありません、加之ならず統一は政治にさへ行はるれば宜しいと云ふべきものでなくして宗教にも實業にも一家にも個人にも常識的に行はれねばならないのであります、故に統一法を確立ならしむるには神爲的無形の統一法に依るにあらざれば眞實に行はるゝものではありません。

#### 第五節 無形の統一

總ての統一は形体的に行はるゝものなれども無形の力の加ふる統一でなければ眞の活動が出来ないのであります、換言すれば精神の自發力は勿論神靈の靈力と眞理の活用が加へらるゝのみならず尙ほ永遠無究に隆昌する所の元因を有する統一でなければなりません、何となれば神靈の靈力あり精神あり眞理の活用ありと雖も永遠無究的に且つ久しき以前に播種したるものでなければ現在の社會には用に達たないのであります、例せば大なる種子は播種するや直ちに發芽するものではありません、又發

芽しても久き年月を経るにあらざれば熟葉するものでもありません、果して此の如く完全なる統一法があるものなりやと問はゞ即ち我國の統一法は宇宙の大神靈御中主神の靈力を有するは勿論精神力も眞理の活力も總ての人世事業に對する統一を有し給ふのみならず、其播種は天然の世即ち高天原に於て天照大御神の御手に蒔付られ今日は大に成長して眞實を結び當に熟成する時なれば此の時を失はず有形無形總ての統一を完全ならしめねばなりません。

### 第二章 高天原の遺風たる大小の神社

大神靈の感應や眞理の靈用及び精神を修養するには完全なる統一法を有するは勿論之を統一する所の寺院或は教會堂の如き完全なる機關法なかるべからず、故に佛教にも基督教にも其他各宗共に寺院教會堂の設けなきものはありません、然れども彼等の機關は人爲的競争的のものにして一つも完全ならざるのみならず、現今では大に腐敗して眞の統一を有するものはありません、然るに獨り我國の神社のみは微小なりと雖も高天原の遺風にして太古よりの繼續と國家的社會的統一の信仰を有するものにして之に多少の改良を加へて精神的教法の機關とする時は完全無缺の統一的機關となりて獨り精神的信仰を高むるのみならず政治教育實業等の人事總ての事業を神聖ならしむるものであります。



### 第一節 皇統と神社の関係

畏これども皇統も神社も同じく高天原の遺風にして實に我國の皇統と神社とは是非相伴ふて隆昌し給はねばならない所の御性質を有し給ふものであります、換言すれば皇帝は有形上の一切を統一し給ふもの神社は無形上の一切を統一し給ふ筈のものであります、然るに天皇は政事的有形一切を支配し給ふと雖も未だ神社は復古せられずして精神的無形上の事は佛教や基督教や神道教派に放任して顧ざるがゆゑ日本團體の全部は未だ回復ができません、加之ならず彼佛教や耶蘇教等は國家的にも世界的にも統一法を有するかと云ふに決してそうではありません、只に彼等は國家的世界的統一を有せざるのみならず相互に相ひ戦ふて精神的發達を大に沮害するものであります、故に我國に於ては速に神社を復興せしめて有形無形の統一法を完全ならしめざれば眞の平和と眞の安心法を計畫することが出来ません。

### 第二節 神社の信仰と人爲宗教の信仰

人爲的諸宗は一方には或る信仰を有せりと雖も他方には反對を有するので一村中にも數多の宗教ありて相ひ信ずると共に又相ひ敵視する故村治上には勿論事業的協力にも多少の障礙を生せしむるものに協力と與ふるが如きことは決してありません、然るに神社は町村中残らず之を信仰するものにし

て何宗と雖も僧侶牧師の外は必ず之を尊敬するものであります、加之ならず神社は毫も他を卑み自ら高くすると云ふ弊害は殆ど皆無にして國家的信仰と三體一致の修養法を示しつつあり是れ取りも直さず高天原の淨清潔白なる遺風なるがゆゑであります、誠に我國に之れあるは天祐の幸福にして此の幸福を實用するにあらざれば總ての教を統一して此の世を榮光的神器の世に進化せしむることは出来ません。

### 第三節 神社は惟神の會議場たること

太古高天原に於て神集神議の事があります、實に之を天の安河原の神議會と申します、此の如くに此の世が神靈精神的進歩するに隨ひ尙ほ々々神聖なる會議の必要があるのであります、加之ならず會議なるものは人世治安の爲めに最も大切なるものなれば成丈け神聖に行なはねば神聖なる治安は得ることが出来ないのであります、然るに我國は高天原の最初より神聖なる會議即ち神代の遺風が嚴然として備はりてあるにも拘らず精神的神聖なる真議會を開會せざるものは神社を復古せざるからであります、故に大小の神社を神聖會議場として國縣郡町村の代議士や又は官吏たるものは町村或は國郡人民と共に時々神社に集合して精神を修養し又神聖會議法を實行する様にいたさねばなりません、何んとなれば此の法方は町村は勿論國家の全体をして漸次神聖なる道徳に至らしむる眞の手段方法である



が故であります。

第四節 神社には改悔法慰安法を實行するに天祐の効力を有し給ふ事

精神的罪過あるもの不徳なるもの或は不幸なるものを教誡し或は改悔せしむるにも又慰安法を行ふにも神社に於て行ふときは自ら神聖に感化せられて根本的の感化法が行はるゝ様になります、何となれば神社は神聖場にして神靈と真理と精神の和融せらるゝ所ゆゑ斯の如く道徳を行ひ教誡を爲すには最上無比の天祐神遺の好機關であります、實に今日の如く繁雜なる世には此の神聖機關無くして叶はざるものであります、殊に我國の神社は如何なる避村邊地にも在すゆゑ如何なる避地にも眞の感化眞の慰安法は勿論神器の修養を行ふに適應しない所はないであります。

第五節 神社は神事業と共に生産的事業をも奨励せしむること

神社は高天原の遺風たると共に生産的事業も高天原の遺業たるものなれば生産的事業を行ふには是非神社に於て精神的に之を奨励するにあらざれば神聖に發達せざるものであります、殊に事業を勵行するには第一信用にして第二が勉強力第三が金力であれば先づ其第一の信用が神社に於て精神的に養はれたる所の信用でなければなりません、再言すれば通常の信用では眞の協力が出来ません、故に高天

原の遺風即ち神社をして神聖會場となすときは自ら神靈精神眞理なるものが三体一致の信用的に養はるゝがゆゑ惟に信用を高むるのみならず又自らの勉強力も大に増加するものであります、此の如く信用あり勉強力あれば資本は隨て需供せらるゝものであります、然るを資本金を先とするにあらざれば今日の生産事業を起すことの出来ざるは眞の信用がないからであります故に是非神社の復古が必要であります。

第六節 神社は無形の交通機關たること

有形的國家を善化せしめんとするには無形の交通機關なかるべからず、或は俱樂部とか宴會とか種々の交際機關わかと雖も費用のみ多くして益する所甚だ少く遂には交際倒れと申して身代をかたむけること等種々の不利益に陥る様なことの多々あります、然るに神社に於ける交際法は惟に上下の交際を厚くするのみならず、精神的融和なるがゆゑ自ら相互に交際費を用ゐずして其上にも又精神を修養し神靈に感應する所の力を増加せしむるが故神社は此の上もなき神聖的交通場であります、實に神社は兩得兩益なる交際場でありと申さねばなりません。

第七節 模範村を作らんと欲せば神社を先きに復古せざるべからざる事



今や政府に於ても見る所ありて各所に模範村を設け實業道德兼行の町村を興さんとせらる然れども是れは第二の事業にして第一の事業神社を先にするにあらざれば決して第二の事業は成功せられざるものであります。第一の事業とは申すまでもなく大小の神社を復古せしめて教會場修養場國禮場とならしむる事はれであります。斯くすれば模範村の如く繁雜なくして帝國一般に實業道德兼行の町村が容易に製作することが出来るのであります。實に此方法は今日に始むることにあらずして高天原よりの遺風であります。加之ならず國體維持法の爲め又萬事萬業を盛大ならしめんが爲めには是非神社を復古させねばならぬのであります。

## 第五編 神爲淘汰

此の編は進化論の語を用ゐ題したるものにして進化論と本著とは是非一致協力を要する點あるがゆゑ此の編を特に神爲淘汰と申すのであります。加之ならず神器の世と神爲淘汰とは相近うして相共に講究すれば神器の世の來るべきことも神爲淘汰の確實にして以後の社會には愈々盛んに行はるべき事をも了解するのであります。又たダーウイン氏の自然淘汰説を補ふて現在及び將來に活用せしむる爲めにも缺くべからざるものであります。何んとなればダーウイン氏の自然淘汰説は事實にして世の生物的物體は斯の如くに進化したるや明かなりと雖も世を益する事が甚だ少いのであります。換言すればダーウインの説は人世以前に行はれたる進化にして今日に行はるゝ進化説ではありません。又人爲淘汰の如きは今日に行はれつゝあるも次第に衰微して獨立することは出來ないのであります。然るに神爲淘汰は人世には盛に行はるゝものにして人爲淘汰も神爲淘汰の力を借るにあらざれば獨立して活動することが出來ないのであります。况んや自然淘汰の如きは原理を講究するには益する所あるも實地として利益が甚だ少いのであります。故に此編は神器修養の爲め進化論活用の爲め或は天地人三體循環講究の爲めに述べむとするのであります。



## 第一章 ダーウイン氏の淘汰説の幼稚

實にダーウイン氏は進化論の大家である生物進化の起るべき自然淘汰説を著して科學界に大功績を現された人であり、換言すればダーウイン氏出るにあらざれば生物の本則を明かにして世の進化する所以を了解することが出来ません、然れども彼れダーウイン氏の説は至れり盡くせりと云ふべきものでなくして惟々原理の本元を發見したりと云ふのみで未だ世に活用せらるべきものではありません、精言すれば進化の原理は斯の如くなりと云ふに過ぎないので之を以て宗教を改革しやう道徳を修養しやう實業を奨励しようとするも決して出来得べきものではありません、實にダーウイン氏に引繼ぎて之を活用するまで研究する人の起らなかつたのは惜むべきことであります。

## 第一節 進化の期限及び性質

生物の進化するや之より明かなる事實はありません、然れども其の期限と性質を明瞭ならしむるにあらざれば進化の状態を明かにして此の理を人性に適合することが出来ません、即ち生物の進化には三つの最も確信すべき期限があります、即ち胎内の進化の期、生長の進化の期及び行爲的進化の期是れであります、第一胎内の進化の期は最も變遷すべき期にして下等動物より上等動物に變遷的最も甚しく進

化すべき期間と思ひます、魚、蠅、鯨、豚、牛、兎、人間も殆んど同一体より進化して遂に今日の状態にまで至つたのであります之を胎内の進化と云ふのである、第二期の進化は惟生長するのみ矢張り人は蠅、鯨、豚、牛、兎と形体に大變異を來さないで唯幼稚が大人に生長したるまでに過ぎないのであります、第三は行爲の進化にして形体には關係せずして只行爲のみ進化する時であります、然るに今日の世界は何如なる期であるかと申しますに第三期に居るのであります、併しダーウイン氏の論は第一期にして未だ第二第三期に進んで講究せざるが故に利益する所が甚だ少ないのであります。

## 第二節 生存競争は第一期にあらすして第二期より始まる事

優勝劣敗的競争は第一期には著く起るべきものでありません、何んとなれば胎内の進化の期は自然的供給物のみを以ても豊かに生存する事が出来るからであります、もつとも適不適に依りて生存すると生存せざるとがあれども兎に角此の期の進化は競争的のものでなくして無意識的に生存發育と云ふ様な方法に進化したものでありませう然しながら生存競争の原因は此期に含有して居ることは明かである、換言すれば此の期は生存生活繁殖と云ふべきもので生存競争も優勝劣敗も適者生存も原理は是れに基因してありたることは覆ふべからざるの事實にして惟々此の期には之れがはげしく起らなかつたこと云ふまであります。



### 第三節 生長的進化の期

地球の表面は始め胎内的に生物を養成したるも次第に成熟して遂に高等植物を發生せしむる様に至りたので或者は胎内的生活を變じて胎外的生活に變遷したのであります。此の時より眞の生存競争が始まりたものと思はれます。而して此の時より生長的進化がいちじるしく行はれて變化的進化が漸く鈍くなつたものであります。然しながら此の期と雖も長の年月には形体のみが單に生長すると云ふでなくして變体的多少の進化もあつたものと思はれます。殊に人類が動植物に對しては人爲的淘汰を行ひつゝあるのであります。

### 第四節 行爲的進化の期

行爲的進化は人間社會のみに行はるゝ進化にして動物界には行はるべき進化ではありません。此の進化が進歩するに隨ひ自然進化が漸く鈍くなりて總ての物が人爲的行爲に支配せらるゝ様になつたのであります。然るに進化論者は生長的進化や行爲的進化の區別を明かに論じませんから進化論の言ふ所は事實なるにも拘らず人世社會に應用することが出来ないであります。加之ならず行爲的進化と胎内的進化と混合せしむるが故其の本元確實にして倒すことは勿論出来るものにはあらざれども胎外行

爲的進化の世には此の論のみを實行することが出来ません。換言すればダーウイン氏の淘汰説は健康なる赤子の如く未だ著しき活動を爲さざれども生長するに隨ひ活發に働くものと言ふまでに過ぎないのであります。

### 第五節 淘汰の區別

淘汰を論ずるに三つの區別を明かにするにあらざれば現在及將來に適用して世の開化の實事を助くることが出来ないであります。三區別とは自然淘汰人爲淘汰神爲淘汰の實際的天然自然の行動であります。此の三事は是非區別して論せねば自然界と動物界及び人間界の區別が立たない様になります。現に進化論者が動物と人間の區別を明瞭ならしめ得ないのも此の區別を明かにせざるからであります。實に動物界と人間界とは確固たる區別があるのみならず自然的進化に拘らず人間界の行爲的進化は無限に隆盛せるものにして人爲の知識を以て之れを推察することが出来ない程のものであります。之を稱して神爲淘汰と申すのであります。

## 第二章 神爲淘汰の本原

神爲淘汰の本原は云ふまでもなく宇宙の大神靈にして終始なきは勿論生死もあるべきもので有ません



けれども人類世界に行はるゝ様になつたのは後ちの進化にして最初は自然淘汰其次は人爲淘汰其次に神爲淘汰が行はれ始めたのであります、而して神爲淘汰が行はるゝ様に成りてから人世と云ふ樂土が建立せられたので人世の元始は神爲淘汰に始まつて他の動物界と別物になつてゐる、換言すれば人世の開祖者は神様で人は其後と相續者である故に宗教を論じ道徳を論せんと欲せば人間界と他の動植物界と區別を立て論ずるにあらざれば進化論の事實も哲學科學の精神も明かに證明する事は出来ません、況んや神靈精神真理の三体を一致協力せしめ神爲淘汰を神聖に行ふて神器の世に到達せんとするも他動物と共に進行せられ得べきものではありません。

### 第一節 進化論者の紀元論

進化論者の云ふ所は人間と他動物とは今日こそ非常に懸隔有と雖も其本初に溯れば人間も獸類と同一なるものより進化したるものである又猿の様な獸類もガヘルコの様なものから進化したるものなるが故人間は根本的勝れたものでなく段々と進化したもので神とか佛とかがありて人間のみを干渉的に作りたるものでないと云ふのであります、然るに宗教的進徳家の説には人間は神の特別な恩恵を請けて特別に創始せられたりと云ふのである尙ほ進化論者は之を打消して種々の事實や證據を擧げて論ずるがゆゑ遂に確然たる事實論となつたのであります、就中胎兒の始めは一滴の精液より次第に進化して完全なる形体を成せるが如く生物の最初は殆ど同一物より千種萬類に進化して今日の繁雜にまで至らしめたるると一々證據を擧げて論ずるが如きは實に進化の本原を看破したるもので物質的學問の原理を講究するには此の如き學に依らねばなりません。

### 第二節 宗教家の紀元論

宗教家の唱ふる紀元論は進化論者の唱ふる所と全く異にして即ち人には靈魂と云ふものがある、其は神より來るものにして人は其系統を繼續せるが故神は特別に人世を保護する爲めに此の世界を創造したるものであると耶蘇教の創世記を始めとして他の創世説も人間を主としたるものにてあります、然るに其の云ふ所は進化論に比すれば淺し何んとなれば人間と雖も其大元は元形質と云ふ微菌の様なものより何千何萬億の長年月を経て進化したものとせねばなりません、然るに宗教家は人間は神の殊力によりて直ちに此の形体の儘に發生し或は造くられたるが如くに論ずるが故其の本元を道理的に説明することが出来ないから佛教の如く無闇に長く云ふものもあり、又基督教の如く僅々六七千年と云ふものもある是れ進化論と適應せざるのみならず、此等に對して答辨することが出来ないものであります、加之ならず舊來の宗教には人爲的獨斷説がありて進化論の如く原理を正して論せざるが故學者に充足を與へることが出来ないであります、然れども神の殊力によりて特別に人世のみが創立せら



れたり云ふこと又は事實であります。

### 第三節 進化の順序並に人爲淘汰の興り

進化には自然の順序がありて始めは胎内的自然の進化である、換言すれば進化せねばならない必要があるから進化するのであります、然れども自然の必要は容易に講究し盡すと云ふ譯にはゆきません、何となれば身体の構造胎内の變化等は人知を以て盡くさるべきものではありません、此の關係を明にするを自然淘汰の理と云ふのであります、又生長的進化は形体の變化を企望するのでなくて其の形体を大きく丈夫に成さんとするが主であります、是れ即ち高等動植物の進化法であります、併しそれまで進化するには相當の地位を要するのでは非生存競争に従事せねばならない様になつたのであります、而して其の生存競争にスペンサーの云はれたるが如く適するものは隆盛す適せざるものは滅亡する其の適不適に不知不識無限の助力を要求する様になつたのであります、之れが取りも直さず人爲淘汰の本原となつたのであります、即ち穴を掘りて住居するとか木の葉を綴りて衣服に代ふるとか妻子と同穴するとか敵と戦ふに石を投げ棒を持つと云ふやうに總て他の物を利用するので自然淘汰に優勝する様になつたので之を稱して人爲淘汰と云ふのであります。

### 第四節 精神的慾情の發達

人類が段々生長して他物を利用することを知ると共に貯蓄的慾と又妻子を養育することは單に情慾のみに留まらずして自然界に於ける優勝劣敗に勝利をしめんとする念力を助長せしめたのであります、而して妻子を養ひ他物を利用するには多少の時間を要するが故食物及び或物を貯へねばならないので女子は草木の菜根を探るとか男子は獸類を捕へるとか云ふ如く分業が始まつたのであります、又分業を行ふには統一がなくてはならないから其統一を行ふ爲めに統治者が必要となると共に精神的淘汰法が行はねばならない様になつたのであります。

### 第五節 神爲淘汰の發達

他物を利用して妻子を養ひ適用品を貯へんとするには精神的感覺が發動せざるを得ないのであります、是れ取りも直さず天地の神靈に感應する様になつたのであります、換言すれば仰ぎては青天をながめ伏しては地の廣大と生物の多種多類に驚き何んとなく人間以上に神靈的能力のあることを悟る様になつたのであります、加之ならず之に依頼したるものは非常に勢力あり然らざるものは人爲的進化の繁雜に堪へずして遂に衰退すると云ふ有様に至つたのであります、是れ神爲淘汰の始めにして次第に行



はれねばならない様になつたのであります、精言すれば人類は此の頃より始めて神の恩恵を請けらるる様になつたので此れから人世の事が大に進歩し人類と獸類と區別せらるゝ様に成つたので之が眞の人世の開闢にして其以前の世界は神靈的胎内に居たものと申さねばならないのであります、何んとなれば神靈的母の胎内にありては未だ神靈に感應せざるがゆゑであります。

### 第三章 神爲淘汰の創世に關係すること

自然的人爲的に係らず他の恩恵に依らずして進化するものは一つもありません、第一地表の適度成立水、空氣、光線其他種々の天恵及び相互の關係に依りて物は進化するのであります、然れども無意識に受くると意識的に受くるとによりて大に其度を異にするのであります、換言すれば習慣的に天恩を受くると精神的に受くると其の進化に非常な差のあることは吾人が説明するにも及ばないことであります、再言すれば物質的進化には木火土金水及び光線に依頼せねばならざるが如く精神的進化を爲すにも神靈の感應力に依らねばならないのであります、尙ほ再言して之を云へば神靈の感應力によるにあらざれば精神界は決して進歩せざるものであります、故に神爲の淘汰開發は無限の精神的文明の大基礎を開設せられたのであると申さねばならないのであります。

#### 第一節 物質以上の信仰

最初の人類が物質以上に精神的靈力のあることを發見せられたるは更に高大なることにして其は死又は天變の驚怖等によりて興りたるにせよ或は天然自然の美觀より來たりたるにもせよ其大靈力を信仰して精神的行爲を神的高尙ならしめたと云ふものは人世の榮光的本元の開發と申さねばなりません、所謂人間が世話して穀物や庭木や家畜等の千種萬類に進化せしめたるが如く其れよりもより多く精神的神靈の感應力によりて人の精神を高尙的向上的に進化せしむるのであります、誠に神爲淘汰の如く往古より現在は何論未來永遠にまで活動するものは他には決してありません尙又以後の世界に於ても如何に大なる活動を爲すか推量することは容易なることではありません、現在に於て神爲淘汰の年々盛んに進行するのは何よりの目出度い證據であります。

#### 第二節 人類の精神的系統は天津神より繼續すること

人類は肉體以上に精神と云ふものがありて總て肉體が之に従ふて動作せねばならないと云ふことを悟覺するやうになつたのは神靈の自然的教訓にして其教訓が一度行はるゝや愈々精神的修養に従事する様になつたのであります、それゆゑ人類は自己の精神的活動は自己に靈魂なるものありて之を爲さしむ



るものなりと信じ、又靈魂は無形なるが故無形の父あることを悟り之を神と稱して尊拜する様になつたのであります、茲に於てか他動物と縁系を断ちて神と父子の縁を結んだのであります、故に人類と他動物とは精神に於ても行爲に於ても實理に於ても全く關係を異にしたので人が神より來つたと云ふことは深い因縁のあることであります、決して妄誕不稽なることで無くて確かなる事實であります、然るを進化論者は此くの如き事實あるにも拘らず胎内的進化の道理のみを以て神の子孫たること並に人世界開闢以來の高尙優美を破壊せんとするがゆゑ世の人心が承知しないのであります、故に神爲淘汰を理會する様になれば進化論者も人爲的宗教家も大いに悟るところありて相互に一致協力し神器の世に進行する様になるのであります。

### 第三節 萬物の人間の利用となりし元因

精神界と神靈界との通路開作せらるゝや神と精神とが次第に親密となりて精神的行爲は益々發動して人類は身体以上の活動をなす様に成つたので妻子を養育するも他動物と戦ふにも天然の困苦を除きて適良を得んとするにも人爲的思考を回す様になつたので人爲淘汰は次第に行はれ即ち機具を製し草木を伐採し穀物を植ゑる家畜を養ふ等の行爲を爲す様になりましたので他の動植物は次第に勢力を失ひ遂に人類の利用に供せらるゝ様になつたのであります、換言すれば人類は宇宙の大主大神靈の系統を相續する様になつたので他の生物は總て之に服従し之に利用せられねばならない様になつたものであります、それゆゑ人は萬物の靈長と云はれる様になりましたのであへて不當の事ではありません、實際ケ様になくてならないのであります。

### 第四節 人間は人間と云ふ道を行はざるべからざる事

動植物も次第に服従して尙ほ之に人爲淘汰を加へて之を利用する様になつたので人類社會は段々幸福を増加するのみにて眞の神國と云ふべき位置にも至らんとする優勢にいたつたのであります、此際最も憂ふべきとは人が他の動植物を利用して利益を得るよりも其の仲間同志即ち人を利用して利益を得る方が利益の大なるを欲して他人を害する様になつたのが人世界の罪の初めであります、是れ只に一人に對する罪にあらすして人間全体に對する罪であります、又之れが取りも直さず神に對する大罪であります、何となれば神靈の精神を淘汰して萬物を利益せしめ給へるは人類社會をして神國の幸福を得せしめんが爲めであります、然るを神の子孫同胞相戦ひ相攻むるが如きは神に對する罪是れより大なるものではありません、故に人間は人間に對する道を設立して人類社會を健固ならしめねばならない必要が生じたので政事を設け國王が現出したのであります是れ君主獨裁時代の始めであります。



第五節 厭世と人爲宗教の基元

人爲淘汰神爲淘汰相混合し入亂れて次第に複雑となりましたから遂に王國を建て一時は人民にも多少の安心を與へましたが又々困難を生じたのであります。夫れは何如なる所以かと云ふに國王が立ち重役立ちて人民を支配すると共に權利を片寄せ過ぎて權利者は益々權利を高め無權利者は益々無權利となりて上下相ひ争はねばならない様になつたのであります。精言すれば上たるものは權利を強くしよる權利を損せまいと争ひ下たるものは權利を回復しよう上權を削がうと相ひ争うやうになつたので人世が幸福を製作することの代りに競争戦亂の淘汰場となりて他動物界よりも苦痛を感ずるやうになりましたから世を厭ひ早く神境に歸りたいと思ふ様な厭世的思想が生じたので遂に人爲的宗教が興つたのであります。尤も宗教の興りたるには種々の原因がありますが先づ大体は斯くの如きものであります。

第四章 神爲淘汰の現在の状態に就て

人の他の動植物を淘汰し即ち人爲的に動植物をして長年月を経る間に其の性質に従ひ期に應じ變に隨ふて淘汰を致したるが如く神爲淘汰も種々の困難に屈することなく之を譬へて申さば彼れは宗教とも

なり哲學ともなり科學ともなり儒學ともなり或は戦争をも興し或は鬼ともなり佛ブツともなり悪人ともなり善人ともなりて千辛萬苦の結果今日の文明にまで至らしめたのであります。再言すれば君主獨裁時代となり人爲宗教時代となり科學時代となり又天然の世にさかのぼりて之を繼續して神器の世に至らしむる様になつたのであります。此の如く神爲淘汰は休むことなしに正々堂々と邁進するのであります。故に此の章は其の大略を述べんとするのであります。

第一節 佛教の功德と世の関係

佛教は東洋の精神的思想に大關係を及ぼし又人心をして一時安心ならしめたることは申すまでもなき事實であります。然れども惜いかな佛教は感情的に安心立命を興へたりと雖も物質的文明には勿論自然的淘汰にも神爲淘汰にも盡力しなかつたのであります。否多少盡力いたしたにもせよ其の盡したるよりも害うたる方か却て多いのであります。故に支那安南等の文明に遅れたるも佛教の關係が少くないのであります。又佛教の東洋各國に賛成せられたる所以のものは神秘的前世今世未來の三世を設けて何事も前世の約束である王皇と生るゝのも大臣となるのも又卑賤不遇と生るゝも皆な前世の約束と歸め如之ならず此の世は僅か五十年、換言すれば王皇の如く樂んで暮すも五十年苦痛して暮すも五十年未來に永遠無究の極樂淨土に往生すべしと進むからであります。此くの如くに此の教は人民に歸



りの安心立命を興へたるのみならず其の時の政府が下人民に對し壓制的政道を行うには最上の好機關であつたのであります、再言すれば佛法さへ盛んに行はれてあれば下人民を馬鹿にすることが容易かつたのであります、故に支那朝鮮を始め我が日本に於ても第一に王皇大臣が最も先きに佛教を用いたのであります、又佛教は神爲淘汰を看板として内實は人爲獨斷的に結んだもので半開の世ならいざ知らず以後の世界には根本的改良を加ふるにあらざれば世に適用せられざるものであります。

### 第二節 支那的の神爲淘汰 儒教道教

支那には孔子老子等が教を建てられしのみならず堯舜夏殷周等の模範的政道ありて西洋科學的文明の發るまでは隆盛なる國で他に比すべき國も殆んど稀なる程の國でありましたらう併しながら現在の科學的文明に遅れたと云ふものは佛教老子教孔子教が三体一致して自然生活方に注意しなかつたのであります。換言すれば老子教も孔子教も佛教に統一せられたのであります、實言すれば上は王皇貴人を始めとして下萬民に至るまで佛教を尊信する様になつたから其の間に僅の儒者や道學者等が何を申したどて佛教的厭世隱險主義に勝つことが出来ません、加之ならず支那には繁雜なる文字がありて智腦の八九分までは之れに消失したのでありますから尙ほさら佛教に抗する暇なく或は衣食に追はれて講究する餘裕なき様になつたのであります、然るに佛教は之を機として一方には不可解の讀經をいたし

又た一方には通俗簡易なる説教を以て布教に従事するが故儒教は佛教の爲めに壓倒せられたのであります、實に科學的文明は佛教の如く獨斷的に繁雜なる思想をさけて單純なる自然的思想に越くにあらざれば眞に發達することが出来ないのであります。

### 第三節 基督教の神爲淘汰

基督教は佛教の如く隱險主義にあらざれども世を罵倒し他教を破壊せんとする點に於ては佛教より酷烈なる風がありまするやうなれども神を信じ精神を養ひ忍耐力を有することは基督教の特徴であります、又過去前生の約束を云はず只天地間に唯一の神ありて之に隨ひ此のおぼしめしに適ひさへすれば幸福を得らるゝものなりと教諭するのであります、然れども神は此の世を幸ひするのが目的にあらずして未來永遠の幸福を興へんとするのが神の目的であると云ふことは佛教と殆んど同一であります。鬼も角も唯一の神を信せよ神は全知全能純善なるがゆゑ神に總てを任せよ神に任せさへすれば何事も心配するには及ばないと人民を教導すること及び日用欠ぐべからざる必要のものを神に祈願すること、は誠に善き方法にして科學の助けともなつたものと思はれます、然れども佛教と同じく神爲淘汰を人爲に結びたるを以て基督教はやはり基督教にして夫れ以上に進歩することが出来ません惜むべきことであります。



#### 第四節 哲學の神爲淘汰

哲學は人爲宗教と異にして人爲宗教は神爲より演繹して人爲に結ぶ哲學は人爲より歸納して神爲を明にせんと欲するので其精神や善し故に哲學を神聖に講究して真理を明かにすれば眞の宗教は自ら了解せらるべきものであります、實言すれば哲學と眞の宗教とは車の兩輪の如く之を並行せしむるにあらざれば宗教も哲學も眞の活動を爲すと能はざるものであります、尙ほ實言して之を言へば哲學も宗教も或は科學も其本原は人事以上に位するものなれば何時かは必ず一致協力して眞の活動を爲す處に至るのである之を神器の世の行爲と申します。

#### 第五節 科學の神爲淘汰

科學は物質的人爲的の區別を問はず總てを解剖的に神爲淘汰否な眞理を以て總ての淘汰を均しく實行せしめんとする手段方法であります、換言すれば神爲と精神と眞理の三体が一致協力して物質的機械的に活動するのが科學の精神であります、故に科學は理法講究的に動くものと政事實業的に動くものと種々の區別はあれども其の本元を推究すれば三体一致の神爲淘汰より出でたるものにして他動物は勿論下愚の人と雖も科學を講究して事物の理を實地に應用せんとするが如きは容易ならざることであ

ります、それゆゑ世は神器の世に到達するも科學的實業は益々進歩して世の終りまで隆盛なるものであります、何となれば科學は哲學の如く人爲より歸納して神爲を明にせんとするにもあらず、又宗教の如く神爲より演繹して人爲に結ばんとするにもあらず、唯其の必要に應じて眞理を規矩として講究する學なれば科學の時代には科學的科學の必要あるが如く神器の世には神器的科學神成の世には神成的科學は必ず興らねばならないのであります。

#### 第五章 完結 眞知眞勇眞善

此の章は本著の完結を論ずると共に國家及び世界の精神的靈動即ち神爲淘汰の完結をも論せんとするのであります、何となれば世界の全体は勿論東西南北國々多しと雖も一國として物質的文明に適應する所の完結法を有する國は未だありません、加之ならず物質的は益々發達して精神的道德界を益々繁雜ならしむるがゆゑ之に伴ふ所の精神的完結を講究するにあらざれば人類の大多數は文明と云ふものに機械的に使役せられて精神的無限の幸福と榮光的安心立命法を滅殺せられて實に人てふ動物は禽獸より不幸なるものに墮落せねばならない様になります、故に物質的文明の進めば進む程精神的完結法を講究して物質的文明と共に精神界をも眞の文明に到達せしめねばなりません、然れども之を講究せんとするには夫れ相當の材料なくてはなりません、換言すれば眞知眞勇眞善なる材料を有するにあ



らざれば精神的完結法を講究して眞知眞勇眞善なる神器の世に到達せしむることが出来ないのであります。

### 第一節 神器の修養

神器の修養とは畏くも皇祖天照大御神の授け給ひし三種の神器を心の本殿に安置せしむることにして決して六つかしきものではありません、換言すれば我が心に神鏡神劔神玉なる三種の神器が天津神より與へられてあると會得さへすれば夫れで宜しいので其の外に何にもいらないのであります、是れが取も直さず神器の修養にして即ち榮光の神に感化せられたのであります、此の如くに會得する人なれば自ら精神も行爲も眞知眞勇眞善となりて則ち身其の儘に榮光の神とならるのであります、誠に斯く安らかにして又高尚有益なる教は世界各國何處を尋ねても我が日本のみにして其の外には決してありません、故に吾人日本人民は世界に率先して神器の修養を行ひ榮光の民とならねばなりません。

### 第二節 神器の人民

日本の國体は神器の性質即ち眞知眞勇眞善によりて開國せられたるものなれば、政治は勿論實業教育等の總てを眞知眞勇眞善的に完結するにあらざれば世界に率先して現在の過度時代の難關を越えて神

器の世に到達することが出来ないのであります。

又た吾人日本人民は取りも直さず神器の國民なれば日本國民の總てが眞知眞勇眞善なる神器によりて各々其の精神を修養盡力するにあらざれば日本をして眞知眞勇眞善なる世に到達せしむることが出来ません、併しながら現在過度時代の繁雜なる日本國民をして盡く神器を修養せしむることは容易なる事業ではありません、換言すれば神事業を興すにあらざれば之を實行することが出来ないのであります、それ故夫れに適應する所の機關を設けねばなりません、果して我國には夫れに適應する所の大小の神社ありと雖も其の神社をして神器修養の機關たらしむるまでの機關法を設けねばならないのであります、然らば如何なる機關を最初に設けねばならないかと云ふに吾人神器の人民は政事宗教實業をして神器の修養をなさしめんが爲めに神器會なるものを興して神器の爲めに盡力いたさねばならないのであります。

### 第三節 天地人世の基點と完結

天地人世の大完結に屬する精神的世界的眞の基點を確立ならしめんと欲せば個人國家及び世界に適合するにあらざれば間に合ひません、又政治宗教實業等に適するものでなければなりません、又神靈精神眞理に盡用せらるゝものにあらざればならないのであります、又宇宙の本體大神靈と未來永遠に結



び附けらるゝものならねばなりません、加之ならず現在今日の人々は勿論人事の世に人爲的に作爲したるものでは決して眞の基點となして總てを完結することは出来ません、此の如く完全無缺の基點及び完結法は佛耶教には尙更哲學科學其の他何教法何學說に於ても決してあるべきものでありません、獨り我が日本の天照大御神の定め給ひし神器教のみは天地人世の大基點又は大完結にして宇宙の本体大眞空天之御中主神に基因して未來は天壤と共に無窮にわたらせ給ふのみならず眞知眞勇眞善なれば總てに適應せられすと云ふことはありません、故に吾人日本國民は申すまでもなく世界萬國の人民と雖も此の基點によりて完結するにあらざれば精神的眞の幸福眞の平和及び眞の安心立命を得ること能はざるものであります。

#### 第四節 最大なる高尚優美と最大なる安心立命

凡そ此の世に於て何にが最も高尚優美なるかといへば眞知眞勇眞善なる三體一致の教法はと高尚優美なるものはありません、加之ならず其の眞知眞勇眞善なるものを客觀的に宇宙とか神とか眞理とか稱して美觀的に賞賛するにわらずして主觀的即ち自我的に玩味せらるゝものであります、換言すれば自ら榮光の神となりて萬事萬業即ち如何なる事業にても之れを神事業として之れに従事するのであります、再言すれば神器を修養すれば自らの精神も行爲も自ら眞知眞勇眞善に感化せらるゝのみならず宇

宙の大神靈や眞理に感應せらるゝが故に總てに安心立命が得らるゝ様になるのであります、此の如く高尚優美なる榮光と眞の安心立命法は何人にも容易に得らるゝのであります、夫故神器の教は教の教へ道德の道德宗教の宗教として國家にも個人及び世界にも政事宗教實業等の總てに此の最大なる安心立命が與へらるゝのであります、斯様の教は我が日本の外には何處にも決してあるべきものではありません。

## 神器之世大意 終



33  
624

賣捌所

東京神田區  
表神保町

東京堂

版權  
所有

明治四十年二月二十日印刷  
明治四十年三月廿一日發行

定價參拾錢

發著  
行作  
者兼

北海道十勝國河西郡伏古村

宮崎濁卑

印刷者

東京神田區雉子町卅四番地

深山一郎

印刷所

東京神田區雉子町卅四番地

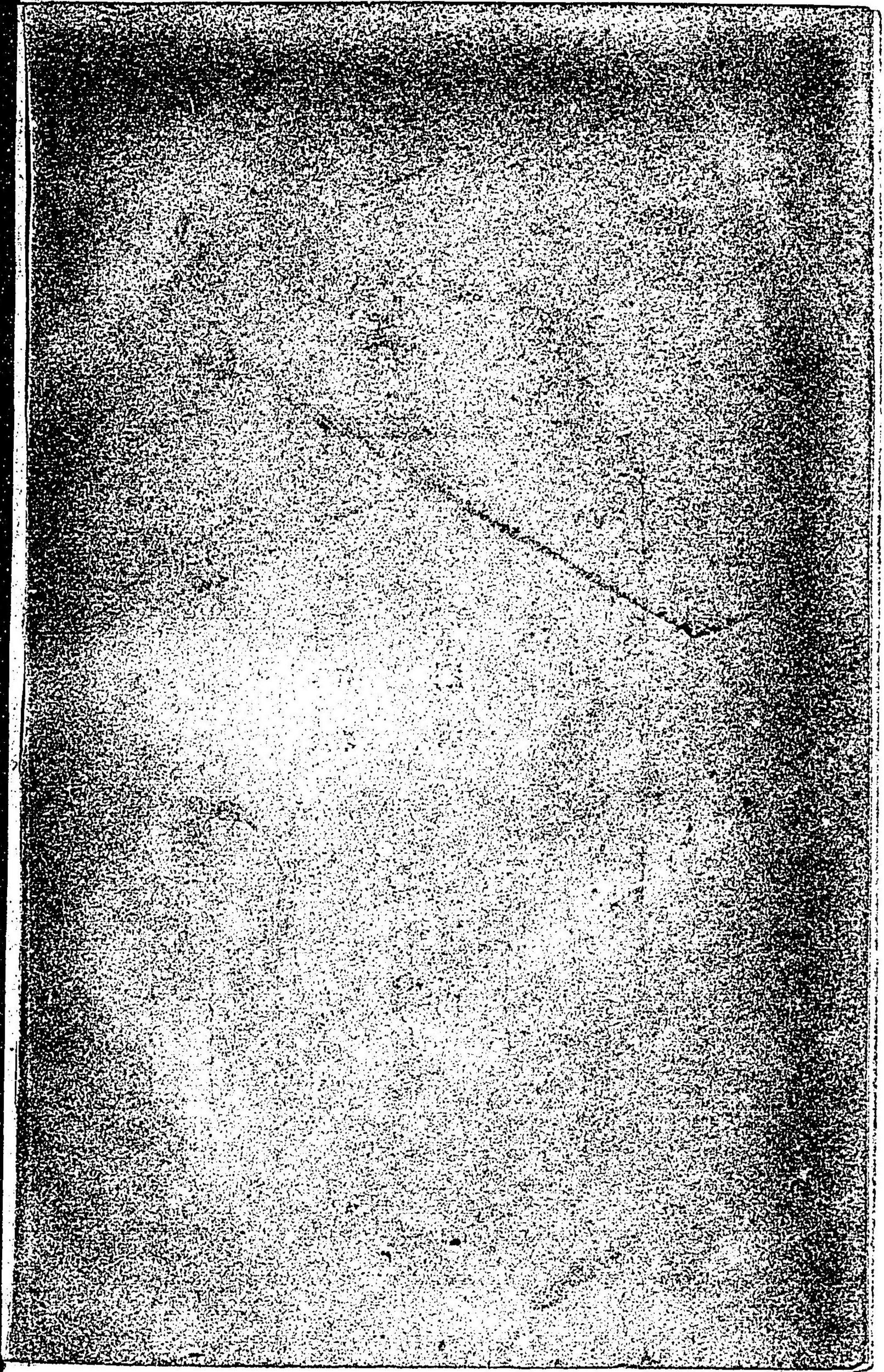
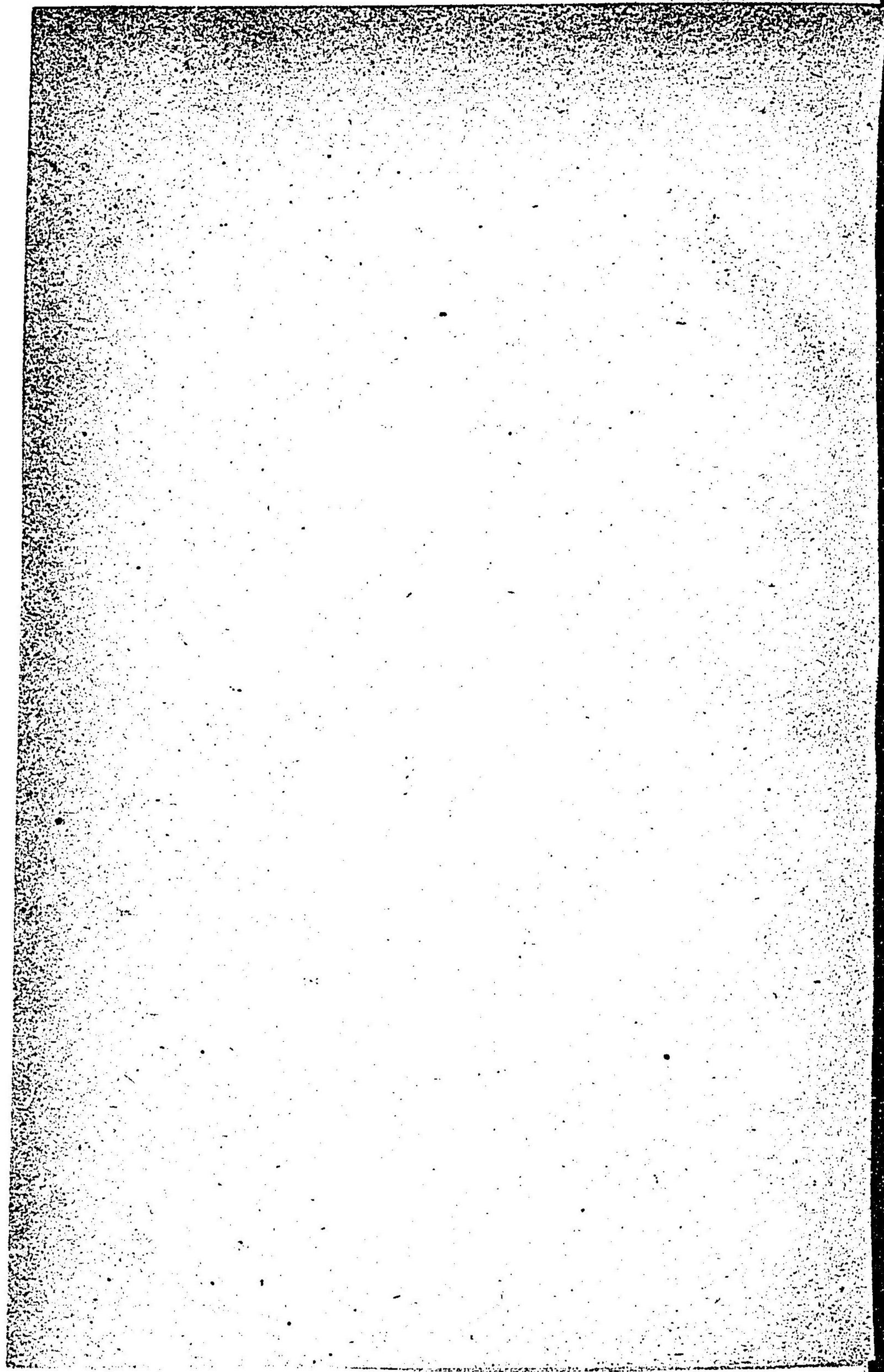
成章堂

17/3/41

Vertical text on the right side of the page, likely bleed-through or faint print.

六十三



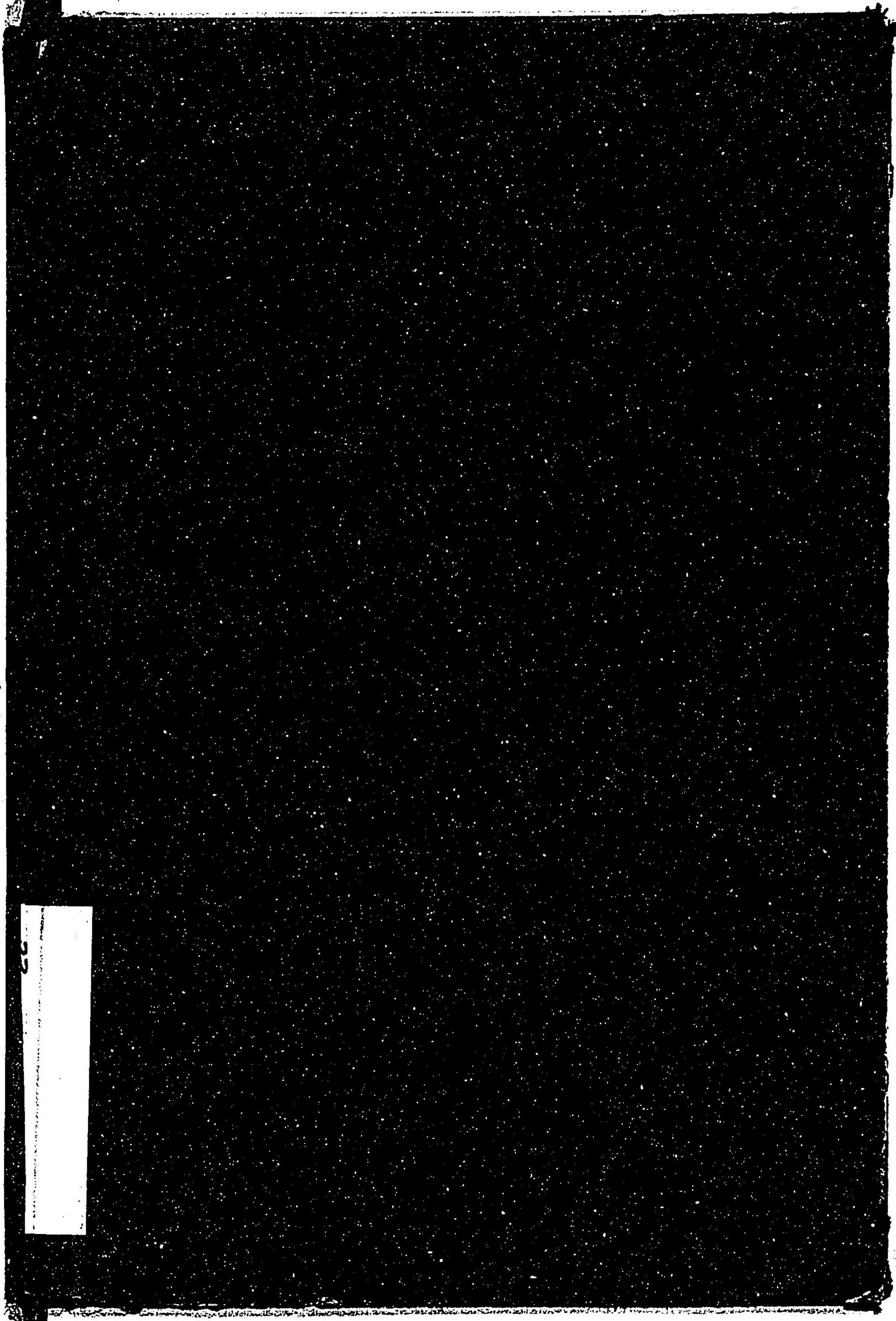




38

624





55